小児科医による乳児飼育

皆藤

この作品はR18描写を含むため、18歳未満の方は閲覧禁止です。

HinaProject Inc.

注意事項

このＰＤＦファイルは小説家になろうグループサイトで掲載中の作品をＰＤＦ化したものです。
　このＰＤＦファイルおよび作品の取り扱いについては、小説家になろう利用規約が適用されます。そのため、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止いたします。作品の紹介や個人用途での印刷および保存にはご自由にお使いください。

【作品タイトル】
小児科医による乳児飼育

【Ｎコード】
Ｎ２７９９ＣＴ

【作者名】
皆藤

【あらすじ】
小児科医が赤ん坊を拾った。
愛を込めて「飼育」することにした。

取得

その日は確か新月だった。
産婦人科には夜中に産気づいた妊婦が、救急車やタクシーで次々と運ばれくる。哺乳類の本能で、なるべく外敵に襲われない深夜に出産ラッシュは来る。それに伴い新生児科も、受け入れに忙しくなった。中には超低体重児も居たらしく、人が足りずに小児科の若いやつが引っ張っていかれた。本来夕方5時には帰れる通常業務日なのに、私も後処理をいくつかこなし、やっと落ち着いたのは、朝４時頃。
病院からの帰り、空は少しだけ白んで、虫の鳴き声も聞こえない。薄暗い中で、街頭の灯りが道を点々と照らしている。そろそろバイクに乗った新聞配達員が来るだろう。
家に着き、車をガレージに入れる。早くベッドになだれ込みたいと考えながら門を開けようとすると、影に見覚えのない小さめの段ボールが置いてある。
捨て猫か捨て犬か？まさか爆弾なんてB級映画的な展開か？と疲れた思考で、そっと箱の中を覗き込んでみる。
タオルに包まれた、赤ん坊がいた。
驚き、様々なことが頭に浮かぶ。はっと赤ん坊の命を心配し、すぐに赤ん坊を家の中に入れた。

三月だが、早朝の外の気温は１０℃もない。いつからそこにいたかは分からないが、次第によっては、命の危険がある。この子は目を開けておらず泣いてもいない。

私は疲れも眠気も忘れ、この新生児の状態確認と処置について考え体が動く。医者の本分だ。

玄関を抜け、リビングのテーブルにダンボールをそっと乗せ、赤ん坊を抱き上げる。乱暴に切られたへその緒。見ればまだあちこちに乾いた血液も胎脂も付着している。脱水症状を起こしてるようで、体温はやや低くぐったりし、呼吸は浅い。脈は弱く、肌の色はやや青くなり、血液酸素量も低い。

体温を上げるのか先か、いや新生児用の点滴がここにあったろうか。一瞬の判断が命取りだ。思考を止めるな。必ず助かる。助けてみせる。

―――

夜中の三時。煙草の煙を燻らせ、書斎でパソコンに向かっていると、ベビーモニターから赤ん坊の泣き声が聞こえた。ちょうど3時間ほど。

1ヶ月もすると、赤ん坊の体力は回復した。以前はか細い泣き声しか上げられなかったのが、肺も発達して大きな声で泣けるようになった。それを嬉しく思いながら、手早くミルクを作って地下の子ども部屋へ向かう。

子ども部屋の空調は、常に赤ん坊に適温に保たれているため、少しぬるい。あのミルクとベビーパウダーの混じったような、甘ったるい独特の匂いも部屋に漂っている。

ベビーベッドから、以前より少しだけ重くなった赤ん坊を取り出し、首を支えながら抱きかかえると、私の顔を見て安心したような目になった。

「ほら、いい子だね、ミルクだよ」

そう話しかけると、まるっとして可愛い目を潤ませ瞬きをした。顔をりんごのように赤く染めて、顔の横に涙の跡がある。哺乳瓶に入った人肌のミルクを口元へ持っていけば嬉しそうに喉を鳴らしてミルクを飲んだ。顎がよく動き、細いのどが上下する。満足そうにミルクを飲む顔を見ると、私も仕事の苛立ちを忘れ笑顔になる。

警察や児相には通報しなかった。

初めからするつもりはなかった。通報したところで、母親が見つかる可能性は低いのだし、見つかったら見つかったで母親は子どもを捨てたことで捕まるだろう。子どもは養護施設で育つのがおちだ。それに、おそらくこの子は私の子だ。

ミルクやオムツなど揃えられるものは揃えた。元々この家は医療研究所として父親がくれたもので、だいたいのことは出来る環境だ。

私は父親の病院に勤めて悠々と小児医療研究している身だったが、この子を拾ってすぐに、一身上の都合で通し休職を申し出た。父親

の権力のため私は融通されているようで、私はこの家で研究論文を書くことだけが仕事になった。

ずっとこの子に付き添っていられる。

私は、戸籍も人権もないこの子を「飼育」することにした。

取得（後書き）

どうも。作者の皆藤です。

作者に医療知識は全くありません。素人です。

多くの閲覧に驚くと同時にとても励みになりました。亀更新ですので、気が向いたらお読みください。

1ヶ月

この子に戸籍はない。
捨てた母親が、出生届を出すとも考えられない。つまりこの子はこの世に存在しないことになっている。
今後も世間に分からないように育てる為には、小学校などの義務教育を受けさせず、公式の医療機関にもかからないこと。まあ、私が居れば少しの病気なら問題ない。そこらの小児科医よりは腕は立つ。ある程度の教養は、私が教えればいい。
出来れば、外に出さずにずっと家の中で育てるのが一番いい。

「美味しかったね」

ミルクを飲ませたら背中をゆっくりさすりげっぷをさせる。この子はもう生活リズムは整っているようで、ミルクを飲んだらすぐに眠り、だいたい3時間ごとに目が覚めてくれる。育てるのがとても楽なタイプだ。
ミルクを飲んで機嫌が良いうちにオムツを替える。最近の紙オムツの進歩は素晴らしく、漏れもない。一カ月もすると慣れたもので、おしりを綺麗に拭き取れるようになった。
お腹の下から外陰部にかけても綺麗に拭き、小さな大陰唇を開き、小さな小さな膣口も柔らかく拭き取る。薄いピンク色で、てらてらと光り、柔らかい。何もかもが小さく、少し力を入れれば傷をつけてしまいそうだ。

解放感から、尿道からは無色の尿が少し飛び出た。とっさにおしりふきをあてると尿を吸い、指に生暖かさが伝わる。赤ん坊の尿は少しだけ乳くさい。

尿道の上には、針ほどに小さな陰核がある。小さいが、確かに皮に包まれた突起がある。これから成長すれば皮がめくれていき、快感を得るためだけの突起になる。母親の子宮の中で男性器になりきれなかったもの。

この小さな部位は、８０００もの快楽神経端末が集まり、刺激を受けるのを待っている。

私は、尿とエタノールが混じった匂いのそこを、ゆっくりと口に含み、舌でちろちろと舐めた。

周りの柔らかい細胞の中に、僅かに神経の塊が固く、私の舌に確かに感じられる。

…私は、小児性愛者だ。

快感

赤ん坊が快感を得られるのか？と聞かれたら、その通りだ。

赤ん坊というのは、かなりストレスが多い生き物だと言われている。暑いと思っても服を脱げない。お腹がすいてもわざわざ泣いて主張しないと食べられない。痒いところもかけないのだ。

ストレスが多いもの…例えば重労働を強いられる看護師や教師などは、よく淫乱であると言われているが、あながち間違いではない。ストレスが多ければ、軽減するためになんらかの快感を持って発散する必要がある。脳からノルアドレナリンを分泌するような刺激が必要になるのだ。

しかし赤ん坊は快感を感じる刺激自体が少ない。そのため、ある評論家は、赤ん坊は排便の際にエクスタシーを得ていると主張していた。根拠となる論文も読んだが、私もそれに納得する部分が多かった。

そもそも人間の股間部や粘膜は、快感を得るように出来ている。快楽神経は多く集中し、刺激すれば性的快感を得られる。赤ん坊は、腕が短く、自ら刺激する術がないのだから、排便の際に快感を得ていてもおかしくはない。

つまり、赤ん坊は快感を得られるのだ。

夜眠る時は彼女と一緒に寝るようになった。この子が来てから、私

の寝室は一階ではなく、地下の子ども部屋だ。ふにふにと柔らかく、甘い香りのする赤ん坊を抱いて眠ることに、私はふわふわとした幸せのような、穏やかな気持ちを感じていた。

正直生活するだけなら地下に全て揃っている。私も仕事がなければ、ずっとここにいてもよいほどだ。小さめだがキッチンもあり、バスルームもトイレもある。アパートの1Kといった感じで、白い壁紙の明るい部屋。無いのは窓と青空くらいだが、困るものじゃない。一日に必要な日光量は太陽光ライトでまかなっている。時計は時間に合わせて見た目も変化するようになっており、夕方には日の入りが見え、夜には星空が見える。

部屋の4分の1を占めているキングベッドは今は2人で使っているが、いずれはこの子1人で使うようになるだろう。早く大きくおなりと呟いて、彼女の小さな頭を撫でる。

寝る前にベビーバスに入れ、全身を優しく泡で洗う。生後3ヶ月になると体に膨らみが出て、皮膚もしっかりとしてきた。赤ん坊らしい薄茶色の髪の毛が、ふわふわとはえている。温かいお湯でその髪の毛を濡らし撫でる。

柔らかい頬っぺをツンツンとつつくと、にこっと笑い、私の目を見て、あー、と声を出す。いいこだ、可愛いね、と呟いて、また頭にお湯をかける。

声もよく出すようになってきて、あー、うーという意味のない喃語をよく話すようになった。子どもの発声が早いかどうかは、養育者がよく子どもに話しかけるかどうかで決まるため、私はよく声をかけた。

入浴を終えると、キングベッドにタオルを引いて彼女を寝かせる。お風呂気持ちよかったねーと話しながら、柔らかいタオルで軽くおさえるように胸の水滴を吸い取って行く。乳首には、まだ色も凹凸も付いていない。ぎゅっと強く握った手も開いて、小さな指の一本一本にも、タオルを当てていく。指の爪は魚の鱗のように薄く、小さかった。

オムツを替える時のように足を抱えて、蒙古斑の残るお尻の水滴を取ると、彼女の足を開かせて、太ももの内側を拭いていく。最後に彼女の最もデリケートで柔らかな部分にタオルをふわっと押し付ける。そこは深いスジが一本入っているだけで、肌色の陶器のように艶やかな2つの膨らみを描いていた。

私はその膨らみをそっと二本の指で開いて、わずかに覗いたピンク色の粘膜の水滴をタオルに吸い込ませた。

ベッドサイドに置いてあるベビーオイルを手に取る。カチッと蓋を開けて、トロトロと手のひらにたっぷりと落とした。体温で温めるように両手を合わせて、手にオイルを馴染ませる。

「さぁ、気持ちよくなろうね」

ベビーオイルがたっぷりとついた手で、肩から順にベビーマッサージをしていく。これは毎日、繰り返している習慣で、彼女も声を出して気持ちよさそうにしている。ベビーマッサージは親子のスキンシップとしてよい手段で、素肌の体温、気持ちよさを味わえる。人肌は暖かく心地いいことを知れば、精神は落ち着き眠りにもつきやすい。

首、肩、胸、お腹と手を滑らせていく。

まだ、彼女の何もかもが両手に収まるサイズだ。お尻も頭も片手にすっぽりと収まる。そんな小さな全身にベビーオイルを滑らせ、優しく揉み込こむ。

さらに彼女をうつ伏せにして、今度は背中から脇腹、お尻から足へとゆっくりとオイルを馴染ませていった。

足の指一本一本までオイルを馴染ませながら小さすぎる指先に感動すら覚える。

「君の肌は柔らかくてすべすべだね」

赤ん坊特有のふにふにとした触感が気持ちよい。

10分ほどの長い時間をかけて、全身にオイルを馴染ませ終えると、すでに彼女はとろんとした目になっている。体から力が抜け、あんなに頻繁に動かしていた手足も、時折ぴくっとなるだけになった。それだけ彼女はマッサージによってリラックスしたのだ。

今まで手のひら全体で彼女の身体に滑らせていたが、今度は軽く指を立てる。右手の中指と薬指を、ツーっとゆっくり、お尻から首に駆け上がるように滑らせる。触れるか触れないかの刺激。産毛を撫でるように、今度は首からお尻へと滑らせていく。

それはもうただのマッサージではなく、人間の性感を引き出していくそれだった。

ゼリーを手に取った。

エコー検診などをするときに暖かいゼリーを塗られると思うが、あれと同じように簡易なドライ保温器に容器の先を指して、常にゼリーが人肌の状態にしてある。

「次はここを気持ちよくしようね」

そう声をかけ、彼女の半開きだった足をもう少し開く。外陰部を触ると、彼女はぴくんと反応した。オムツを替えたあと陰核を舐められる習慣や、お風呂のあとのこの習慣をじょじょに覚えてきたようだ。

暖かいゼリーを陰核の上に出す。ゼリーは淡いピンク色の着色料が含まれトロトロしている。陰核の下に降り、ぴったりと閉じた大陰唇の深く入ったみぞを降りていった。

彼女はこれからの期待からか、ただの反射か、たまに口元がニコッと笑う。「うー」と声を出し、手足がよく動く。

動く足を捕まえ開かせると、大陰唇をくぱっと開き、さらに陰核の上からゼリーを垂らす。今度は尿道、膣口を通り、肛門に達した。

彼女は陰核への暖かいゼリーの刺激に、お腹や足をぴくんとさせて、恍惚そうな表情を浮かべている。まるで子猫のように甘い声を出す。あまりの可愛さに気持ちが早まるが、順序を間違えば危険なことに

なる。自分を抑え、ゆっくりと事を進める。

彼女の身長は現在５５㎝だ。つまり単純に言えば、成人女性の三分の一程度の身長ということになる。だが人間は身長で成熟度を見るのではなく、体重でみるのだ。体重により薬の量も変わる。彼女の体重はまだ４．７㎏しかない。成人女性の約十分の一だ。外見はふっくらしてきていても、かなり未熟なのだ。

無理は、出来ない。

右手の人差し指で肛門まで垂れたゼリーをすくい取り、陰核に塗りつける。ぬるぬるぷにぷにとした触感の中に、小さいが確かに小さな芯がある。しばらくその芯を堪能する。勃起の変化は些細すぎて分からないが、ほんの少し赤みが増したように見える。

親の眼鏡が入っているかもしれないが、彼女の顔はどこか弛緩し、トロンと恍惚な目をしてるように見え、口をゆっくりとぱくぱくとさせている。少なくとも、嫌がっている素振りはない。

２０分ほどだろうか、小さな陰核をくちくちと揉み込んでいるうちに、彼女はだんだんと「うーっ、ぅ」と、すこし苦しそうな声を出して、体に力を入れている。嫌がっているようではないので続けると、「ぁぅーっ」と少し高い声を出し、足をピクピクとさせながら力を抜いた。顔を見ると、目を細めて口からはよだれを垂らし赤い唇を濡らしていた。

頭を撫でて「気持ちよかった？」と聞くと、彼女はしばらく私の目を見て、「ぅー…」と返事をした。

生後三カ月の乳児が絶頂したことに感動を覚える。あまりの可愛らしさに、私の息があがっていることに気付いた。

ゼリーが乾いてしまったので、再び彼女の膣口にゼリーを垂らす。

枕元から、毛羽立たない、滅菌した綿棒を取る。

「今日は、中に入れてみようか」

そう言って綿棒を彼女に見えるようにゆらゆら揺らす。綿棒の軸には５㎜毎のメモリが入っている。

そっと膣口をくすぐり、ほんの少しづつ中に入れていく。綿棒の直径は６㎜程度で、痛くはないはずだが、目視出来る処女膜に当たった感触があった。

「痛かったら言いなさい」

彼女の表情は変わらないし、言っている意味はわからないだろうが。

慎重に綿棒を進めていく。狭く小さな処女膜の穴をかい潜り、ゆっくり、さらに奥へ進む。

…抵抗が強くなった。子宮口だ。メモリを見ると、約２０㎜程度。

これが生後三ヶ月の幼膣の長さである。

そもそも、処女膜はともかく、膣内部というのは鈍感な部位で、基本的に少しくらいの傷がついても痛みを感じることもなく、少しずつ開発しなければ快感を感じることはほとんどない。ましてや、まだ体が未熟なら神経も発達していないのだから、尚更だ。

綿棒をゆっくりと、ぐるりと回す。処女膜を、少しづつ広げるように。彼女の表情は、少し緊張しているようだ。今迄感じたことのない刺激のため、戸惑っているんだろう。しばらく続けているとその違和感のためか、少しぐずってきたので、そこでやめた。

おしりふきでゼリーを綺麗に拭いてやり、オムツをして、抱き抱えてぎゅーっと、抱きしめた。

甘い、赤ん坊の匂いがした。

彼女は、私がいなくなれば3日も経たずに死んでしまうだろう。私が彼女を生かしている。彼女は私が世界の全てだ。

私だけの彼女…

愛を込めて、おでこにキスをした。

涙点

それは、彼女を拾って10日ほど経って気付いた。彼女はずいぶんと可愛らしい目をしているのだ。

いつもまん丸とした大き目の瞳にうるうると涙を溜め、私を見つめている。私を求めているようなその瞳を見ると、思わず勃起しそうになる。

しかし、異常なのだ。いつも瞳が潤んでいるというのは。

私はすぐに、あることに思い当たった。

それからは毎日、目薬を差し、目頭のマッサージをしたが、三ヶ月経っても効果はなかった。今は目薬で菌の繁殖を抑えているが、このまま酷くなれば涙嚢炎になり、毎日目が開かなくなるほど目脂が出るようになる。

可哀想だが、プロービング（鼻涙管開放術）をしなければならない。

先天性鼻涙管閉塞は主に流涙を主訴とする先天疾患で、新生児の20人に1~2人に見られる。よくある疾患だ。

通常、涙は涙腺で作られて眼球表面を潤し、目頭にある涙点という小さな穴に吸い込まれる。吸い込まれた涙は細い管（鼻涙管）を通って鼻の奥へと流れるが、この管の途中に膜のようなものが残り、行き止まりになってしまった状態のまま生まれてくる幼児がいる。

そのうち2／3が2カ月以内に自然治癒するが、時間が経ち過ぎるとその可能性が低くなる。

そのためにプロービングを施し、鼻涙官を通してやらなければならないが、幼児が暴れると危険なため、体力がなく押さえつけられる生後三ヶ月から六ヶ月が望ましいとされている。

プロービングに用いる針はブジーと洗浄針を兼ねたもので生理食塩水を入れたシリンジに接続し、加圧洗浄しながら針をすすめていく。プロービングでほとんどの症例において閉塞部が開放され、治癒する。

…生後まだ１４週目の幼児には、麻酔は危険なため、基本的には使用しない。

「今から、目の手術をするよ。痛いけど、頑張るんだよ。いい子だから、頑張れるよね」

そう告げて、彼女を手術室に連れて行った。

今夜の彼女の夜泣きは凄いだろう。彼女は痛みに眠ることも出来ないかも知れない。私は彼女の夜泣きに一晩中付き添う覚悟を決め、手術準備に入る。

まず、彼女の体をバスタオルでぐるぐると巻く。手足をまっすぐに伸ばしているため、芋虫のようだ。頭部から顎にかけても包帯を何重にも巻いていく。

すでに彼女はこれから何が起こるか分からず、また手術室の無機質な雰囲気や冷たさに怯え、甲高い声で鳴いている。いつもなら、私

は彼女が泣いたらすぐに抱き上げあやすところだが、今回はそうは行かない。

手術台にバスタオルでぐるぐるになった彼女を乗せ、黒いベルトでギチギチに固定していく。少しでも動けば、彼女の可愛い瞳が傷付き、一生開かなくなる可能性もあると考えると、きつく固定せざるを得ない。

おでこも包帯の上からベルトで固定し、さらにその上からセラミック金属の輪をカチリと嵌める。これで彼女は、頭部を一ミリも動かすことは出来ない。

「ぅアアァぁン！あぁぁぁん！」

手術室に彼女の鳴き声が反響する。あまりの恐怖からか、声が裏返るほどの叫びだ。目からはすでに大量の涙を流し、私に助けを求めている。そんな彼女にこれから施す処置をするかと思うと心が痛んだ。しかし彼女のためを思えばと、私は心を無情にし、精神を医者に切り替えた。

「始めるよ」

「キャァア！！」

0．3㎜のブジーを、彼女の目頭にある涙点に差し入れる。鼻涙管を少し進んだところに、彼女の涙を堰きとめている膜がある。シリンジを押して洗浄水の水流で破れることを願ったが、思いの外、膜が厚い。これでは生後1歳になっても自然治癒は難しかっただろう。私は医者として、ぐっと力を込めて、膜を突き破る。

瞬間、私の手にブチッっとした感触と、彼女からかん高い絶叫が上がる。この世に生まれてまだ１４週しか経っていない小さな体から発せられるとも思えないような、叫び。

突き破る肉の感触を抜けると、抵抗は薄くなり、そのまま進めると鼻の奥にブジーの先端が見えたため、ゆっくりと抜いていく。すると涙点から、血が少し混じった洗浄水と膿みが排出された。貫通したことを確認し、少しほっとする。彼女の叫びも少し緩んだ。

私は０．３㎜のブジーを消毒液に付け、次に０．５㎜のブジーを手に取り、再び涙点に差し込んだ。０．２㎜太くなれば、膜の傷はより深く裂けて、激痛が伴うだろう。生理食塩水がいくら浸透圧が低いとはいえ、沁みないわけでもない。先程と同じような絶叫が響きわたる。

彼女は顔を真っ赤にし、ピクリとも動かない体を持て余している。唯一動かせる足の指がぎゅっと縮まり、血が行かないのか黄色くなっている。

０．５㎜を抜き０．７㎜を手にした。一瞬、血にまみれた瞳を開けた彼女が、ブジーを手にとった私に、恐怖と、助けを求めるような矛盾した揺らぎを持った目をした気がした。生後１４週ではまだ視界はぼやけ、ブジーが見えているわけではないはずだが。私が手を伸ばすと、ぎゅっと目をつぶり、血の涙を流し、彼女ができる最大限の抵抗をしている。

私は抵抗を無にするように、泣き叫ぶ彼女の目をこじ開け、小さな涙点に冷たいブジーを突き刺した。

０．７㎜の次に０．９㎜を貫通させて、処置を終えた。

彼女は叫び疲れぐったりとしている。しかし少し安堵のようなものもうかがえる。

私は０．３㎜のブジーを再び手に取り、もう片目の涙点に突き刺した。絶望というものを生後三ヶ月の彼女は体現した。

彼女の鼻涙管の膜は厚い方だったため、出血もそれなりにある。通常より傷は大きいだろう。感染症を防ぐために、泣いて真っ赤になった瞳に抗生物質を多めに差す。酷く染みるはずだが、彼女は精魂尽き果てたようにぐったりしながら、弱々しく鳴いた。

処置自体は２０分程度だが、彼女は相当疲れたはずだ。頭の輪とベルトを外し、包帯とバスタオルも外す。ぐったりとした彼女を抱きしめて、よく頑張ったと言って頭と背中をよく撫でてやった。子ども部屋のベビーベッドに寝かせ、しばらく頭を撫でていると、静かに眠った。

寝ている間に術後の片付けを済ませ、私も精神的に疲れたため、コーヒーメーカーのスイッチを入れて、書斎で煙草をふかしながら椅子にもたれて休んだ。

手術の過程が鮮明に頭を巡る。愛しい彼女に、治療のためとはいえ激痛を与えた。それが罪悪感となり私の気持ちをかき回した。頭にキンキンと、彼女の叫び声がこだまする。

私は勃起していた。

苦笑しながら、肉を突き破った感触、彼女の泣き叫ぶ顔、ときおり

私に恐怖と助けを求める表情を思い出し、自らを慰めた。

ベビーモニターからの彼女の泣き声で目が覚めた。しまった。果てたあと、椅子の上で眠ってしまったようだ。

急いで地下への階段を降りながら腕時計で確認すると、手術を終えてから3時間も立っていた。通りで背中が痛いはずだ。せっかく入れたコーヒーも、冷め切っているだろうな。

ベビーベッドには真っ赤な顔をして泣いている彼女がいる。すぐに抱き上げ背中をさする。おむつを確認すればラインが出ていたので取り替えようかと思い、服を脱がせようとしたら、彼女の身体が冷えていた。

部屋は適温に保たれているし、しばらく思案したら、分かった。手術中の過度の恐怖と痛みで汗をかいて冷えたのだ。バスタオルでぐるぐる巻きなっていたのだから、なおさらだ。

すぐに気付かなかった自分を責めながら、風呂に入れるのが早いと、彼女専用の小さな浴槽にお湯を入れた。ちょうどもうすぐ風呂の時間だったし、あの手術は基本風呂の制限もない。彼女は傷が深いため、目元付近だけは避ければいい。

彼女は風呂が好きだ。さっきまで泣いていたのも、服を脱がし浴槽に浸かると泣き止んだ。そもそも、赤ん坊はお湯の中に入れると機嫌がよくなることが多い。おそらく、母親の子宮の中と似た環境だからだろう。

新生児にも使える弱酸性のボディーソープで、頭から足先まで手で撫でていく。布を使ってもいいが、子どもによっては痛がるため、手のほうが健全だ。

ふと気づくと、彼女がいつもと違うことに気付く。湯に浸かって泣き止みはしたが、いつものように和らいだ表情ではなく、ほんの少し固い。手術の痛みで強張っているのかと思ったが、なんとなく違う気がする。彼女の顔を毎日よく見ないと分からない変化だ。

どうした？と、彼女の目を覗き込む。ふ、と一瞬、彼女は目を伏せた。その後は私を見つつも、どこか空を見ている感じだ。彼女が実際に空を見たことはないが。

ふむ。まあ、そうなるか。

３cm

通常、医者は家族に対しての医療行為はしてはいけない。理由は主に、患者に対し感情が強いため、手元が狂う可能性があること。それから、自分に痛みを与えた家族にたいして、患者が負の感情を持つ可能性があることだ。

私は家族だからと言って手元が狂うことはない。近しい者に対して、そんな感情を持つほど、普通の人間じゃあない。

つまり、誰でも痛いことは本能的に嫌なのだ。それを、最も信頼されている者にされれば、疑心を抱いても仕方ない。それは１４週の赤ん坊でもだ。
それに彼女はまだ、治療だからなんて理屈を理解も出来ないだろう。自分の気持ちさえまだ理解出来ない、弱い生き物なのだ。まだ三ヶ月なのだから、いずれ手術のことなどは忘れるが。

彼女にミルクを飲ませ食欲を満たしながら、ちょうどいい機会だ、と思った。
彼女の本能に、そんな疑心は無用だと教えよう。時間はかかるかもしれないが。

彼女をいつものようにベッドにタオルを引いた上に乗せる。いつものようにベビーオイルでマッサージをして、気持ちをなるべく落ち着かせるように、時間を多めにかけた。細くぷにぷにとした腕から小さな小さな指先までオイルを染み込ませながら揉む。ほんの少し力を入れれば折れてしまうようだ。

表情が少し和らいだところで、いつもの人肌のゼリーは取らず、戸棚からビンを取り出す。無色透明な、とろみのある液体だ。蓋を開け、先のまるまったスポイトで液体を吸い取る。わずか５cc程度だ。彼女の足を開き、いつもの陰核に、は垂らさず、膣の小さな穴にスポイトの先を入れ、たった２㎝先、彼女にとっては膣深くに、スポイトの中身を発射した。
いつもの人肌のゼリーではなく、冷たい液体がいきなり体の内部に現れたためか、彼女の足はピクンと動いた。しかし液体はすぐに発熱し、むしろ体温より高くなる。

しばらくの間は、彼女に優しいキスをした。おでこから鼻の頭、ほっぺからよだれにまみれた唇に。唇へは、わずかに触れ合うだけのキスだ。彼女には、虫歯になって欲しくないのだ。

頭をなで、肩からお腹に手を滑らせる。世界で一番柔らかく吸い付くような肌を柔らかく揉む。３分ほどそうしていると、彼女の目が眠いような、トロンとした目になってきた。そこでやっとゼリーを陰核から膣口に多めに垂らし、指先で陰核をぐるぐると撫でる。

「ぁ…ぁっ」
彼女はいつもより声を出して、快楽を感じていることを表してくれる。彼女の脳内からはノルアドレナリンも分泌され、目の痛みも少し和らぐはずだ。

痛みを忘れ、快感に没頭させる。痛みを頑張って我慢したら、快感というご褒美がもらえる。それを幼く小さな脳の中枢に、刻み込むのだ。

陰核を見ると、いつもより赤く充血している。膣穴はもっと赤い。
手にサージカルグローブ（手術などで使うラテックス手袋）を装着

し、ゼリーをよく馴染ませた私の小指を、小さな膣口にあてがう。

昨日までに綿棒は１０㎜の太さまで入るようになった。私の小指の太さは１３㎜。少し不安だが、薬の弛緩効果に期待し、ゆっくりと探りながら小指を進める。小さな膣穴が広がり、やがてピンと張っていく。それでも指を止めず、肉をかき分けていく。

私の身体の一部が、初めて彼女の中に入っていく。そう思うと、私は感動で打ち震えた。

…ナカは、熱い、とても。気持ちがざわめき、このまま壊してしまいたい気持ちになってくる。

膣を小指でクチクチと左右に揺らす。小指の第一関節が埋まり、それを出したり入れたりする。彼女の表情はなんとも言えないものだった。異物感３割、嫌悪感３割、快感４割程度だろうか。体の中から圧迫される感覚に慣れていないため、気持ち悪さがまだ勝っている。

小指を尿道側に押し付けながら、お腹側から膀胱をぐりぐりと押す。

「あうぅーっ！」と彼女は甲高い声を出す。

尿道口から尿がピューっと円弧を描いて飛び出す。単に膀胱が圧迫されて尿が出ただけなのだが、まるで潮を吹いたようだ。とてもエロティックな光景に息が上がる。

「とっても可愛いよ。生後たった三カ月で潮を吹くなんて」

彼女は顔を赤らめ、呼吸が少し荒くなっている。そのままくちくち

と軽く小指をピストンさせながら、小さくぷっくりとしたクリトリスを舐める。皮をかぶり、あつく小さな小さなクリトリスを舌先で転がす。小さすぎて、転がすというより潰すようになるのだが、彼女はびくびくと震えた。

薬の効果もあり、どんどん性的興奮は高まっていることだろう。通常ならうっすらとピンクになっているそこは、血が集まり赤く熟れている。そこに、膣には小指が、クリトリスには舌が絡められ、大人の女ならよがることをしているのだ。

小指をくりくりと探るように動かすと、小さな子宮口がある。先ほどスポイトで薬を直接浴びたそこは、まだそれほど隆起しておらず、ポッチがあると言う感じだ。大人の女性のように硬くはなく、柔らかなグミのような感触だ。いつかここにクスコが入るようになったら、女性の秘密で大切な部屋も開いていこう。まだ、先の話だが。

「アぁぁ…」

子宮口と膣の間の溝に強引に小指を突き入れる。小指は３㎝程度埋まり、少し血も滲んで来た。薬の効果で痛みは快楽に変わっている。彼女はとろんとした目で、快感を受け入れている。

「さぁ、そろそろ子宮でいってみようか？」

子宮口と膣の間に強引に突き入れた小指の先を、さらに強引に上に引き上げる。ぐいぐいと子宮を揺らし、最高の快感を引き出していく。

「ぁイィーー!!」

彼女は手足をばたつかせ、今まで享受したことのない快感から逃げようとする。いくら逃げても、逃れられないのだが。

子宮を揺らして快感に目覚めるのは、おおよそ２０代から３０代からだと俗に言われる。子宮が発達し快感を受け入れるようになってからだと。

彼女がひときわ大きく体を逸らしたと思うと、びくびくと足を痙攣させながら、ゆっくりとベットに沈んでいった。

彼女はとろんとした瞳で、半ば意識を失いかけている。

「気持ちよかった？」

彼女は返事をすることもなく、瞳をゆっくりと閉じていった。

同類

彼女はまさに天使だ。
親の欲目もあると思うが、本当に、可愛らしい子だ。
ダブルベッドでゆっくりと、彼女のお腹をリズム良く軽く叩きながら、思う。
あれから彼女の鼻涙管閉塞は順調に治って行き、目の潤みも少なくなっていった。もう少し経過を見れば大丈夫だろう。
時計の針の音と、彼女の寝息しか聴こえないこの部屋では、時間が穏やかに流れる。呼吸のたびに上下する彼女の胸と、手に感じる早めの鼓動は、圧倒的な命を感じる。
真っ白な肌。赤くぷっくりとしたテラテラと光る唇。長く艶のある睫毛。ふわふわの細い栗色の髪。どこをとっても可愛らしい。
こんな乳児が私のもので、私の好きに出来ることに、幸せを感じる。私の渇き満たされない気持ちが、彼女と接することで、すこしずつ癒されていくのを感じていた。やはり、彼女は天使なのだろうか。
そんなことをぼんやり考えながら彼女を寝かしつけるうちに、私もうとうとしてしまった。しかし、今夜中にもう少し仕事を進めておきたい。気だるい身体に力を入れる。
私は彼女を起こさないように、そーっとベッドから抜け出すのが、上手くなった。

地下の扉はセキュリティロックで、私の指紋で、特定の数字を押さない限り開かない。もちろん彼女を起こさないように、電子音もしないし、扉が開く音も静かだ。

書斎の扉を開くと、外では雨が降っていたようで、窓がけたたましく雨に打たれて鳴っていた。ザーザーという雨の音に混じり、遠くでは雷まで鳴っている。地下にいると、外の天気が分からない。

キッチンへ向かい、コーヒーメーカーのスイッチを入れようとしたら、豆がほぼ切れていた。…明日、買いに行かせるか。

香りの薄いコーヒーを手に、書斎に戻り、ベビーモニターを見ると、彼女はすやすやと眠っていた。

タバコに火をつけ、ｉＭａｃを立ち上げると、Ｓｋｙｐｅの着信一件があった。時間は３０分前。通話ボタンを押して相手が出るのを待つ。

小児科研究をしてる人間の約９５％は、健全で純粋に子ども達のことを助けたいと思っている連中だろう。だからこそ、あんなハードな現場で働けているのだ。
しかし、たまに私のように、子ども達へ異常な愛を持っているやつらがいる。無意識的にでも。医者になって何年かして、自分の歪んだものに気づくやつもいる。

そんな異常な５％のやつが通話に出た。

「ハーイ、カイドウ、元気にペドってルー？」
やけにテンション高い声が聞こえる。モニターには、金髪白人がニ

コニコした顔で映し出されている。あちらはスマホのようで、映像が少しブレている。

「なんの用ですかアウグスト先生？あなた、忙しいんでしょう？」

「ＨＡＨＡＨＡ．忙しいねぇ。なにせ僕を求める女の子達が沢山いるからネ。みんなの〝診察〟にテンワヤンワしてるヨ。ほら、今もこうして診察中なんだよ？」

そう言うとカメラをインカメラからアウトカメラにしたようで、パッと映像が切り替わる。映像には、６．７歳くらいだろうか、分娩台に乗せられ足を開かれ拘束された女の子がいた。性器からは何本かのチューブが伸び、お腹はポッコリと膨れている。

「あなた、診察中でしょう？いいんですか通話なんてして」

「ふふ、このコを気遣ってるのかナ？大丈夫だよ。このコは今ね、イリゲータ（高圧浣腸）でお尻と膀胱に生理食塩水がそれぞれ５００ｍｌずつ入ってるんだヨ。まだすこーしずつ増やしてる。子宮が圧迫されてシアワセそーな顔、ミル？」

黙っていると、カメラが女の子の顔側に移動していく。アングルの体型から６．７歳かと思ったが、もうすこし幼いかも知れない。

腸はともかく、膀胱の許容量は限られている。成人女性で約６００ｍｌ、６才なら１５０ｍｌ～２５０ｍｌ程度。女の子が今までどれほどの拡張をしてきたかは知らないが、平均値の倍は飲み込んでいることになる。

顔が近ずくと、女の子は歯の根がかみ合わず、歯をカチカチ鳴らし

ている。息も絶えだえで、目の横には涙の後があった。しかし、頬は高揚して赤くなり、明らかに快感を得て、カメラの向こう側のアウグストをぼんやりと見ている。

映像がすこしぶれたかと思うと、ゴツゴツとした大きな手が現れ、女の子の涙を拭ってやった。女の子は歯の根が噛み合わないまま、嬉しそうに笑った。

「まだイケる？」とアウグストが女の子に問う。
女の子は少し迷う。６才の平均許容量の倍以上に膨らまされた膀胱は、内側からの圧迫に、軋み、破裂するような恐怖と激痛を味わっているはずだ。眉を下げ、困った顔をしていると、アウグストは耳元で何かを囁いた。小さな声で、マイクは音を拾わなかった。

女の子は夢うつつな顔で、コクンと頷いた。

アウグストは「いい子だネ」と頭を撫で、その手は上側にフレームアウトした。おそらくイリゲータを高く上げ、生食が入るスピードを速めたのだろう。

「アウグスト、あなた、酷いことしますね」

カメラの向こうからは、すぐに悲鳴が聞こえてきた。破裂するような痛みに、耐えられないのだろう。

「ふふ、僕は子ども達のシアワセを願ってるだけだヨ。ところで、僕が渡した薬、使ってみたんでショ。ドウだっタ？三ヶ月の子に使ったんでしょう？君こそ酷いヨ？」

「とても良かったです。鼻涙管開放術の痛みもだいぶ誤魔化せたみ

たいで、あれから痛がることもほとんどありませんでしたよ。ただ、君が言うように副作用が強かったですね。私はいくらでも彼女に付き合いましたけど、私のほうは誰も処理してくれないんでね。大変でしたよ」

女の子の悲鳴に混じり、拘束具がガチャガチャと音を立てている。

「せんせぃ！アウグストセンセェー‼」と、甲高い声が診察室に響く。

「ふふ、君がそんなに彼女にゾッコンだとはね。今度僕にも診させてヨー。」

「嫌ですね。あなたみたいな変態に渡したら、どうなるか分かったもんじゃありません。」

「HAHAHA．じゃあ、そのうちネ。また何かしたら報告してヨ。流石に僕も、生後三カ月の患児はなかなか手に入らないからネ。」

向こうからは、「ぁ…ぁ、イァ…パンクする…せんせい！せんせぃぃい‼」と必死な声が聞こえる。もう、限界を超えているらしい。

「ほら、あなたの可愛い患児があなたに助けを求めてますよ。行っておあげなさい。」

アウグストは女の子に「よくガンバリマシタネ」と言って、生食を止めた。

カチャカチャと音が聞こえる。一瞬器具の音かと思ったが、どうやらベルトを外しているようだ。

「それじゃあ、カイドウ、マタネ」

カメラは女の子の小さな陰部を映し出す。尿道とアナルのチューブはそのままだ。二つの間の小さな膣口に、白人の大きな男性器があてがわれる。

「…ッギャイィィィーーーーッ！」

女の子の悲鳴が鳴ると同時に、通話はプツリと切れた。

「あいつ、ただ自慢しに通話してきただけですね」

外では雨がザーザーと降っていた。

圧迫

人間は圧迫によって快感を得るとは誰の言葉だったか。

実際には圧迫だけでなく、摩擦や吸引なども快感ではあるのだが、安心感や幸福感、力が抜けリラックスするといった快感は、圧迫によるものが多い。

赤ん坊は全身を包まれることで快感や安心感を得て眠りに付きやすくなる。あやす時にぽんぽんと背中や胸を叩いたり、頭を撫でたりする行為も圧迫と言える。

嘔吐感がある人間には背中をさすり、腹痛の時には腹を撫でる。あれも圧迫と摩擦。「手当て」という言葉は、患部に手を当てて痛みを和らげる行為から来ている。

マッサージなどもだ。整体やツボ押し、肩叩きといったマッサージ類はほぼ全て圧迫といっていい。

セックスも、原理的にはお互いの性器へ圧迫を与える行為だ。
男性器は女性器の締め付けによって外側からの圧迫で快感を得る。
女性器は男性器によって内側からの圧迫で快感を得る。

無論それぞれに最適な圧迫の強さがある。闇雲に強く圧迫しても、心地良い快感は与えられない。痛みを与えることのほうが多い。

しかし最適な強さで圧迫してやれば、それは快感となる。

生後三カ月にもなると、首がすわり、手足の動きは活発になる。1～2カ月頃泣くのは、空腹やおむつが気持ちが悪いなどの生理的な不快を訴えてのことだが、徐々に心が発達するに従って、甘え泣きや自分の欲求がうまく通らないときのイライラ泣きなどが始まってくる。

彼女は入浴後にベビーオイルで身体を解し、さらにその後、性的快感を得ないとぐずるようになった。

「うーうー…たー！」

不満そうな声を出し、私にいうことを聞かせようとする。自我が芽生え、心が発達してきた証拠である。私は彼女の要求の通り、ベビーオイルを手に取る。

「あーっ！」と嬉しそうな声を出し、にこっと笑う。素直に快感を得ていることを知らせてくれる。私は彼女を毎日、快楽責めにしているのだ。

しばらくすると彼女は足をM字に大きく開く。早く性器を触って欲しいという合図だということに、最近気付いた。なんて淫乱な赤ん坊か。

厚く皮をかぶった小さなクリトリスをちろちろと舐める。舌を押し付けてくりくりと転がす。クリトリスへの圧迫に、快感を得ている

彼女は、「…あぅー」と可愛らしい声を出す。

唾液で滑ったクリトリスを、人差し指で潰す。表面の厚い皮を動かすのではなく、中の小さな芯を探して押しつぶす。彼女はビクッと足を伸ばし、あられもない声を出す。

再び口に含み押しつぶすが、そういえば今まで、クリトリスを押しつぶすことはしてきたが、吸ってみたことはない。新生児の頃はまだ、粘膜もしっかりできてないため、クリトリスはゼリーのように柔らかく、吸って取れたりしないかと不安があったのだ。今ならもう、大丈夫だろう。

強めにピンポイントで吸ってみると、「きゃあん」と叱られた犬のような声を出した。手足をビクッと震わせている。

そのまま続けて吸う。小さなクリトリスを吸うのはかなり器用に舌を使わなければならない。

「あーっ！キャぅーー！」

彼女は明らかに喜んでいる様子だ。強く吸いながら、先端を潰すように舌でぐりぐりと押す。

彼女はいつもより早く、絶頂を迎えた。思った以上にクリトリスが好きなようだ。

「クリトリス好き？」

たずねると、彼女はぼんやりしながら、にこっと笑った。

「じゃあ、ここの皮、取っちゃおうか？」

クリトリスを撫でながら、彼女にそう告げた。

切ると言っても、流石にまだ早すぎる。
彼女はまだ、陰核と皮が癒着している状態だ。皮だけを切ろうとしても、陰核本体を傷つける可能性があり、危険である。可愛らしい陰核に、傷を残すわけにはいかない。
手順として、皮ごと陰核を肥大させ、癒着を剥がしやすくしてから、陰核本体になるべく傷がつかないように、切除するのが一番安全だろう。

「それはステキな考えだネ。しかしカイドウ、それはまだ、早すぎないかい？」
通話の向こうからは少女の「イタイイタイィィ！！」と叫ぶ声が聞こえている。
「えぇ、ですから、早くとも1．2ヶ月先の話ですよ。まず肥大させてからです。」
「じゃなくてサ。今、保護するものを取っちゃったら、彼女が成長した時に感度が悪くなるヨ？それに、〟ボディから大切なモノが無くなる〟時のステキな表情や声を聞けないのも、勿体ないんじゃナイ？　せめて、喋れるくらいになってからデショウ。」
カチャカチャと、ステンレス器具の無機質な音が聞こえる。

今日は映像が安定している。何かに立てかけてあるのだろうか。先日の女の子よりやや大きい少女が、先日と同じように診察台に拘束されている。

「それもいいですがね。でも、あまり負担をかけたくないんです。今も彼女は、なるべくストレスをかけないように育てていますし。」

「…ストレス耐性をわざと弱めてるのネ。本当にヒドイなぁ。」

「私は寂しがり屋ですからね」

カメラの映像には、小陰唇の左右にそれぞれ1本ずつ、注射針を刺された性器が写っている。アウグストは助手の女性に、「皮を剥いておいて」と指示を出した。「ヒッ」っと息を飲む少女を無視して、助手は陰核の皮を引き上げ、サージカルテープで固定する。

「まずカイドウ、君、乳児のクリトリス本体の大きさ分かってル？」

「さぁ、流石にデータがないですからね。まぁ成人女性で3㎜から5㎜ですから、それの10分の1として、0．3㎜から0．5㎜程度ではないですか」

「うん、ボクもそれくらいだと思う。0．5㎜あればいいほうじゃないカナ。デモ安全に切るには、はっきり目視できる、2㎜くらいにしないと危ないデショ。どうやって4倍にも大きくするつもりなの？」

「地道に吸引しますよ。あなたみたいなのは危険ですから」

アウグストは剥き出しになった小さなクリトリスに、アルコールを

含んだ脱脂綿をピンセットで挟み、ぐりぐりと押し付けて消毒する。
「ィ…ィぃ…せ、センセイ…ビリビリ…します…ッ」粘膜にしみるようだが、叫びを抑えながら、きちんと報告する声が可愛らしい。

「HAHA．そうだネ。やめといた方がイイヨ」

アウグストは助手から受け取った細い注射針をヒラヒラとさせた。
中には透明な液体が入っている。
「掴むよー」アウグストは言うと、右手にピンセットを持ち、その鋭い先端で小さなクリトリスを撫でた。「ァイイィーッ！」と声が上がる。そのままピンセットでクリトリスをガッチリと掴み、下に引っ張る。叫び声が処置室に響く。

「拡張剤？血液を集めるものですか？」

「いや、ただの生理食塩水だヨ。吸引と原理は変わらないけど、手っ取り早いカラ。とーってもイタイけどネ。」

ピンセットを左手に持ち替えて、右手には注射器を持った。
「さ、イクヨー。歯をくいしばってネ」
アウグストは、小さなクリトリスに躊躇なく、事務的な動きで注射針を刺した。
「ヒッ…ッッ」
痛みのあまり声も出ない女の子の様子を見つつ、注射器の中の液体を少しづつ入れて行く。少女が体に力を入れすぎて、足を攣ったり、握りしめた指を骨折しないかを観察しながら行なっている。
針を抜くと、大きく膨れたクリトリスから血の玉が浮き上がる。それをガーゼで抑え、ぐりぐりと止血をすると、少女は「ぁぁあぁ゛…！？」っと耐えられない痛みに全身を痙攣させる。

「何ミリですか？」

「１０㎖。デモあと１０入れるヨ」

少女は痛みのあまり、その声は聞こえていないようだ。２０㎖は、ティースプーン４杯分にもなる。

「ずいぶん急ぎますね。せっかちな依頼人なんです？」

「ソー、１ヶ月で、勃起時３㎝くらいにしてってサ。酷いよネー。マァ、僕に依頼してる分まだマシなんだけどネ。」

そう言いながらもアウグストは、２本目の注射器を手にとっている。

「聞こえてないだろうケド、２本目いくカラネー。シンジャダメだよー？」

赤く晴れ上がったクリトリスに再び針が刺され、少女の喉から「ぎゃァァァァああ゛あ゛」と鋭い叫びが響き、少女はガクッと気を失った。

アウグストはパルスオキシメータで、血中の酸素飽和度を見ると、「うん、大丈夫」と呟いた。

「ソレデサ、カイドウ、この間も言ったけれど、いつか僕にも彼女を診させてヨ」

「嫌です」

吸引

「あーっ！たー」
ミルクを飲み終わり、機嫌がいいようだ。私によく喋りかけてくる。ミルクで白くなった小さい唇をつんつんと突ついてやると、にこっと笑い「ぱーっ！」と大きな声をだす。「ぱ」の音をはっきり出せるので、そのうち「パパ」と呼べるかもしれない。
しかしあまり私はパパとは呼ばれたくない。はじめはパパでもよいのだが、しばらくしたら「先生」と呼ばせたい。
私に父親と呼ばれる権利はない。
この地下の様子は、24時間録画してある。子ども部屋はもちろん、診察室や手術室もだ。複数のカメラが壁に埋め込まれており、人のいる部分を自動的にズームにし記録する。初めて喋るその瞬間も、カメラが保存してくれるだろう。
彼女専用のベビーバスにお湯を入れ、風呂の準備をする。服を脱がして、ゆっくりとお湯につける。毎回のことだが、彼女の性器は毎回お湯で良く洗う。乾燥したゼリーがわずかについているからだ。
私が、ローションではなくゼリーを潤滑剤として使うのはこの為で、デリケートな粘膜を洗うのに石鹸は使えない。ゼリーは水だけで落とすことが出来るが、ローションは石鹸でないと完全には分解出来ない。
皮をかぶって、ほんの頭も出てきそうにないクリトリスをゆっくりとさすり洗う。

「今日から、ここをたくさん膨らまそうね。」
彼女は私を見上げ、「ちゃーぁ」と返事をする。
風呂を上がり、マッサージまで済ませると、彼女は習慣で足を広げる。

小さなクリトリスに少しだけゼリーを付けて、しばらく揉み込む。しっとりと馴染む程度に。彼女がだんだんと発情した表情になり、声を出した時点でやめる。
おあずけを食らった彼女は、不満そうに「うぅー」と声をだした。

準備していたシリンジと透明のキャップを出した。キャップは直径４㎜で、彼女の皮を含めたクリトリスのひとまわり大きいくらいだ。縁は丸く加工してあり、傷をつけない。

キャップの後ろにシリンジを接続する。吸い付きをよくする為に、クリトリスについたゼリーを軽く拭き取る。

キャップを小さなクリトリスに強く押し当てる。彼女は今までにないものを見て、おもちゃだと思ったのか手を伸ばす。その手を取り、彼女の目を見て語りかけるように言う。
「いいかい、君のクリトリスを、強く引っ張るよ。少し、痛いからね。」

「うー？」
彼女のきょとんとした目が、可愛らしい。
キャップを再び強く押し当て、シリンジをゆっくり引いていく。０．１ｍｌ、０．２、０．３…。

彼女の表情に変化はない。
０．５ml、０．６…。クリトリスは、キャップの中の空気を吸いとるに従い、上に引っ張られていく。
今までにも同様の肥大化法をしたことはあるが、さすがに意思の伝達が困難なものにしたことはないため、多少緊張する。
０．７ml、…０．８、

「ふぇ」

突然彼女の顔が歪む。
もう…０．１mlだけシリンジを引いて、キャップからシリンジを外した。キャップの中はそのままの状態を保つ。

「アァァァン！ぁぁぁん！」

外した時の衝撃と痛みで、彼女は火がついたように泣き出した。
おっと、彼女の手がキャップに伸びる。慌てて両手を掴まえベッドに縫い付け、落ち着かせるようにお腹を撫でる。
合計０．９ml分、キャップの中の空気を抜いた。
実際にはキャップを押し付けた分の空気圧などもあるので、０．７ml程度だろう。しかし、見た目的にはかなり引き伸ばしている。
ピンクのクリトリスに急激に血液を集め、粘膜は引き伸ばされている。
元は３㎜程度の盛り上がりだったのが、今キャップの中で８㎜ほどの長さになっている。人の皮膚というのはかなり伸縮性があるので、

この程度なら大丈夫だろう。

「よしよし、頑張ったね。すぐ、気持ちよくしてあげるからね」

とは言ったが、このまま彼女の両手を解放すればキャップを取ろうとするだろう。今も泣きながら、精いっぱいの力で私の腕から逃れようと必死だ。

診察室に行けば拘束は出来るが、おそらく今動かすと、クリトリスが痛いだろう。だがこの部屋に拘束出来そうなものがない…腕を上げさせ布団を丸め腕の上に置くか？いや片手では出来ないな。

しばらく思案したが、結局診察室に連れて行くことにした。彼女がキャップを取ろうとすることに頭がいかなかった、自分が悪い。

「診察室にいくよ」

ごめんね、と続け、抱き上げる。

瞬間「きゃぃぃい」と悲鳴をあげた。

電気を付けて入る。無機質で、やや冷えた空気。床も壁も抗菌素材で出来ている。

診察室には、産婦人科診察台の小型版がある。特注で頼んでいたものだ。どうせ拘束するなら、これがいい。

パステルピンクの皮を張った産婦人科診察台に、裸の乳児を乗せる。手は頭上に拘束。足は脚乗台へ拘束。これでもう、手足はわずかしか動かせない。

彼女は、ずっと火がついたように泣いたままだ。お腹を撫で、そっと頭を撫でる。ゆっくりと安心させるように、語りかけるように喋る。ゆっくり過ぎなほどゆっくりと。

「痛かったね、我慢して、えらいえらい。今からすることは、気持ちいいんだよ。怖くないんだよ。」

タオルを一枚かけ、安心感を与える。

粘液

彼女に根気よく声をかけ、私の体温をなるべく感じるように、小さな身体をさすり続けた。やがて泣き声は収まっていき、可愛らしい目を開いて私を見るまでになった。

キャップの中の陰核は赤く充血し、普段のあの小さな陰核からは想像つかないほど引き伸ばされている。三カ月の彼女は生まれて初めて、そこに激痛を感じているのだ。

彼女が成長したら、その約８０００もの陰部神経終末が高密度に分布している陰核亀頭に、針を貫通させてあげたい。あるいは、陰核亀頭から二股に分かれ、大陰唇に潜り込んでいる陰核脚のほうへ針を進めるのもいいかもしれない。昨日アウグストが生食を注入した少女は声にならない素敵な叫びを上げてくれていた。私の彼女はどんな声で叫んでくれるだろうか。

彼女の濡れた小さな唇を開き、口腔内に人差し指を入れてみる。彼女は本能的に指を吸うが、残念ながら、ミルクは出ない。

小さな舌を撫で、指を左右に揺れ動かすと、口腔内の熱さを指に感じる。指も口腔も神経は多く、比較的敏感な部位で、性感帯にもなり得る。

口腔内から頬に指を押し当てる。柔らかい皮膚が伸び、頬がポコっと盛り上がる。

歯が一本も生えていないピンクの歯茎を、ゆっくりとなぞる。左下の歯茎をなぞり、右下へ。右上へ行き左上の歯茎を擦る。上顎もな

ぞり、奥へと指を進めていく。喉の嘔吐反射には触れない所まで行き、手前の歯茎まで戻る。
「ぁぅーゔー」彼女はくぐもった声を出し、すっかり陰核の痛みを忘れている。
下歯茎の内側を降りて行き、舌の裏側をなぞる。何度か往復して、小さな舌を犯していく。だんだんと彼女は身体の力が抜けていく。
舌を少し押し込まれている状態のため、呼吸がうまく出来ないはずだ。脳に酸素が足りず、彼女はとろんとした目になってくる。
口腔内から指を出すと、彼女の唾液が糸を引いた。
産婦人科診察台を操作し、彼女の上半身を倒し、脚をゆっくりを開く。お尻を突き出す形になり、いつもベッドでするときより断然、彼女の陰部は見やすく「診察」しやすくなった。
彼女は先日の発情期の間に、膣がずいぶんと発達した。快感を感じられるようになり、通常出るスキーン線液だけでなく、バルトリン腺液も出るようになった。ピンクのゼリーとはまた違った粘性の液体を目視した時には、感動したものだ。
そして今、目の前にある小さく閉じた大陰唇を開くと、トロリとした粘液で、膣口が濡れていた。
先ほど彼女の口から抜いた、唾液にまみれた人差し指を、彼女の膣口に馴染ませるように撫でる。小さな膣口から、くちくちと音が鳴る。
少しづつ人差し指を膣口に挿入していく。処女膜はピンと張ってい

くが、それほど強い抵抗はなく埋まっていく。第一関節が埋まり、第二関節が見える所で、子宮口に達した。

彼女は「あっ…ぁー」と、膣挿入の快感を味わっていた。直径15㎜の人差し指が、彼女の最奥まで埋まる。成人女性に指を挿入する時、入れる指の数は多くとも3本程度だろう。そのうちの1本を、生後三カ月の彼女は薬も使わず受け入れている。

ゆっくりと指をピストンする。彼女の狭い膣はシワが伸び、凹凸感は少ない。

尿道側に指を押し付け、何度も擦り付ける。「ぁっあーっぁッぁぅ」まだ括約筋も発達してないため、膣を締め付ける力は弱いが、微弱ながらもきゅっと動くのが伝わってくる。

そろそろ来ると察し、彼女が大好きな、子宮口と膣壁の間に指をねじ込み、その小さな子宮をリズミカルに揺らす。

彼女は…熱に浮かされたように頬はピンク色に染まり、息を荒くしている。

…目はとろんとし、よだれを垂らし、快感に素直に反応の声を出している。

小さなキャップの中で陰核は10㎜にも引き伸ばされ、真っ赤に充血し、甘い痛みを受け入れて快感に変換しつつある。

冷たい産婦人科診察台に拘束され、脚を開かれ、膣口からは透明の粘液を分泌させ…まだ、この世に生まれ三カ月しか経っていない赤ん坊なのに、可愛らしい叫び声を出し、深い絶頂を迎えた。

「気持ち良かった？」

と問うと

「…きぃー…」

と答えた。

彼女のそれが「きもちいい」の「きぃー」なのかは分からなかった。

彼女はゆっくりと眠りに落ちていった。

切除

彼女が指しゃぶりをしている。
ちゅぱちゅぱと指を吸っては離す。目をつむり安心を得て、口を使う訓練をしている。
あと１ー2年したらそうして私に奉仕してくれる姿を、想像したのは何度目か。

彼女の頬に触れると、目を開けた。
「っぱぁぱーっ！あーぶ！」
高い声で嬉しそうに、私を呼ぶ。手を伸ばして抱っこをねだる。

彼女を抱き上げる。体重は5．８kgにまでなり、腕に重みがかかる。
生後5ヶ月に入った彼女は、以前よりも目鼻立ちがすこしくっきりとし、ぷくぷくとした1番赤ん坊らしい体型になった。意味のある喃語をいくつか喋れるようになったが「せんせい」は、まだ言えない。

風呂上がりのベビーオイルで体を解す回数は少なくなり、それを飛ばしていきなり「診察」に入ることが多くなった。
彼女はパブロフの犬のように、風呂に入ったあとは気持ちのいいことがあると記憶し、膣口を湿らせるようになった。

クリトリスのキャップは風呂の時以外は外さないようにした。はじめこそ痛がり、一晩中泣いた時もあった。一カ月の間、ほぼ常に吸引され、今、キャップの中のクリトリスは、２０㎜にも引き伸ばされている。

キャップを引っ張り外す。この時には毎回痛みをかなり感じ顔をしかめる。クリトリスはゆるゆると縮んでゆく。皮の上から触診した感覚では、芯は２㎜程度には大きくなっているようだ。

皮を切除するには、頃合いだろう。

今日、手術してしまおう。

風呂から上がると、以前のように子ども部屋のベッドの上に行くのではなく、診察室の産婦人科診察台に向かう。手と足に拘束ベルトを巻く。

さらに、今日は手足だけでなく腹部と骨盤に、ステンレス製の輪をカチリと嵌める。これで彼女の骨盤も、性器も１ミリも動かせない。

いつもよりも厳重な拘束に彼女はおびえている。こうゆう時には痛いことをするのだと、覚えてしまったようだ。

「いいかい。今日は、まずこのクリトリスに被っている皮を、クリトリスから剥離するよ。クリトリスに透明のキャップをして保護した上で、皮を切り取る。傷が治るまで、クリトリスで快感を得ることは難しい。けれどその後は、気持ちよくなれるからね。」

「たーあぅ！きぃーちぃー」

彼女は私が言っている言葉の１％も分かってはいないだろう。

私は手術の準備を開始した。サージカルテープ、消毒液、生理食塩水、ピンセット、メス、カテーテル、シリンジ、膿盆、透明キャップ…

手を洗いサージカルグローブを身につける。

温水で性器をよく洗う。軽く時間をおいてから、消毒液を含んだ脱脂綿で、隅々まで消毒してゆく。沁みるのだろう、顔をしかめる。

「きゃうッ!!」

3㎜の、乳児用カテーテルを、小さな尿道に差し込む。痛みはあるが、それ自体は一瞬で終わる。膀胱まで達したら、汚水トレイに彼女の尿が排出された。膀胱の中のバルーンを膨らませて、抜けないようにする。

カテーテルの違和感に、彼女は「やー」と、拒否の声を出す。

診察台から上に伸びる、ライトを彼女のクリトリスに当てる。スポットライトのように、集中的に光がそそがれる。ここからは、神経を使う細かな作業となる。

彼女のクリトリスは、一カ月の吸引肥大法により、皮がほんのすこし…0．2㎜ほどだろうか、剥がれて本体が顔を出している。そのわずかなとっかかりに、先端が尖ってはいないピンセットの片方を引っ掛ける。

陰核本体に触れて、彼女は「ひぅっ」と息を吸う。

もう1本、口腔内を診る時に舌を抑えるヘラ状の舌圧子の小型版のような、先端が平たく幅約1．5㎜のピンセットの片方の平を、クリトリスの下あたりに強めに押し付ける。

先ほど皮に引っ掛けたピンセットを上へ上へと上げていく。皮につられてクリトリス本体が伸びようとするところを、ヘラ状のピンセ

ットで抑える。
瞬間、彼女からは「ァぃぃぃっ‼」と声が上がった。
「ベリッ」っと音がするように、一気に１㎜ほど、皮がクリトリスから剥がれた。彼女は鋭い痛みに手足を動かすが、拘束は外れない。
そのままヘラ状のピンセットを陰核本体の皮が癒着しているギリギリまで上げて、押し付ける。癒着はぺりぺりと剥がれていくが、それに比例して彼女の叫び声は大きくなっていった。
陰核は、かなり上部まで存在している。上に行くに従って、癒着が強い部分が出てくる。細いピンセットを隙間にねじ込み、左右に揺らすと癒着は剥がれたが、陰核本体からは僅かに出血した。
「アゥッ…アィィィ…ッ！」
癒着が剥がれたところで、直径３㎜の半球状の、透明なキャップをピンセットで掴み、陰核と皮の間にはめ込んで、ズレないことを確認する。
私は軽く深呼吸した。もしかしたら彼女は、痛みに気絶するかもしれない。
ピンセットで、皮の先を下へ引く。鋭く光るステンレス製メスで、先ほどのキャップの縁をなぞるように、皮を少しずつ切除していく。細かい作業で、ひと息にとはいかない。
「キャゥ…ギャァィィ…ッッ‼」
鋭い痛みに耐えざるを得ない彼女が不憫であり、その声は私の耳を犯すような響きで、脳髄から背骨を通る。
慎重にメスを進めていく。肉厚なピンク色の皮が赤く染まりながら、

彼女の体から離れてゆく。

私は疼痛を訴える股間を意識しながら、彼女の赤い宝石が顔を出していくのを見ていた。

彼女はあまりの痛みに声も出せずに、気絶してしまった。痛みに脳の処理が追いつかないのである。呼吸があることだけは確認して、作業を続ける。

1分程の時間をかけて、彼女の陰核を保護していた皮を切除した。傷口からはかなり出血が多い。

キャップを取り、消毒液を染み込ませた脱脂綿を当てる。途端、彼女は痛みに意識を取り戻してしまった。シンとしていた診察室に、絶叫が響く。彼女が体に力を入れたことで、さらに出血してしまう。消毒液ではなく生理食塩水を染み込ませた脱脂綿を強めに当てて止血をする。

10秒ほどすると、彼女は再びゆっくりと意識を手放して行った。

サージカルグローブについた血液が彼女につかないようにしながら、彼女の頭を撫で、「よく頑張ったね」と褒めた。

子どもにとって、親は世界そのものであり、親から愛されなければ生きていけない。そのための命がけの戦略がそのまま性格の形成につながる。

精神科医、心理学者のアルフレッドアドラーの言葉だ。

私は彼の言葉を理解している。理解しながら、彼女をそのように育てている。

私は歪んだ人間なのだ。

ベッドの上、私は仰向け、彼女はうつ伏せで私の胸にのっている。

背中を軽くぽんぽんと叩く。心音と体温によって落ち着く態勢で、やっと彼女は眠った。鼻が少し詰まった彼女の寝息が聞こえてくる。

乳児の高めの体温が胸からじんわりと伝わってきて、少し汗もにじみそうだ。

彼女は術後、しばらくの間、目を覚ましては泣き、泣き疲れては寝ることを繰り返した。赤くまぶたを腫らして、涙の跡が痛々しかった。ミルクは飲んでくれるが、飲む量は少なくなり、予想していたことではあったが、私も彼女も一時的にかなり疲労していた。

しかし一週間も経てば、彼女の傷はほとんど治り、笑顔を見せてくれるようになった。そもそも性器は血液の巡りが良く、傷は比較的

早く治る部位である。一時的に体重は落ちてしまったが、それを取り戻すようにごくごくと勢いよくミルクを飲むようになった。来月からは、離乳食に入っても良いだろう。

彼女が目覚めたら、ここ一週間彼女に与えられなかったご褒美をあげよう。

「ぱー…」

彼女が不安そうな顔で私を見る。
冷たい産婦人科診察台の上。

「よしよし、大丈夫だよ。今日は、頑張って痛いの我慢したご褒美だから、気持ちよくしてあげるからね」

頭をよく撫でてやり、おでこにキスをする。

裸んぼの彼女は、診察台に手足を拘束されている。しかし彼女の尿道からは、細いチューブが一本伸びていた。尿がクリトリスの傷に沁みないように、一週間前から付けっ放しにしておいた。

診察台を操作して、彼女の上体を倒し、足を開いていく。ぴったりと合わさったスジが見え、こそを開くと、治りかけの傷の中に、皮を失ったピンク色の敏感な真珠があった。

「今日はちょっとつらいから、薬を使おうか」

アウグストからもらった薬ビンの中身を、スポイトで吸い取る。以前これを使ったのは、一ヶ月半前だ。その時彼女は３日間ほど、発情していた。

スジを開いて、小さな膣口を確認する。細いスポイトをゆっくりと慎重に膣に差し込み、薬を子宮に直接浴びせる。彼女は以前のように、冷たい刺激にビクンと足を震わせた。

「すぐ、気持ちよくなれるからね」

彼女の口に指を入れる。まだ歯は、生えていない。つるつるとしたピンク色の歯茎をゆっくりゆっくりなぞる。時々彼女は「ぁぶぅー」とくぐもった声をだす。くちゅりと音がするたびに、私も身体が熱くなっていった。

しばらくすると彼女は、足に力を入れ、顔を赤らめ発情してることを伝えてくる。薬が効いてきたらしい。「欲しぃー？」と聞くと、「ぱぁー…」と、切なく私を呼んだ。あまりの可愛らしさに、喉が鳴る。

一週間入りっぱなしだったバルーンカテーテルに、シリンジを繋ぐ。通常そこは、「出す」ことはしても「入る」ことはない器官、膀胱に少しずつ、精製水を強制的に入れて行く。

１０ｍｌ…２０…３０…

通常、生後３カ月から６ヶ月の膀胱許容量は、３０ｍｌから８０ｍｌ程度だ。１日にする排尿の回数は１５回から２０回程度。汗をかけば少なくなるが、ミルクを飲む量と、ほとんど変わらない量を、尿として出す。

この一週間、彼女はカテーテルを入れていたため、自分の意思に関

係なく排尿されていた。そのために、膀胱許容量は少なくなっているかもしれない。

…40…50

彼女の顔が歪む。単純な排泄欲求。

60…65…

「うなぁ…やアァん…」

彼女はとうとう泣き出す。排尿したいのに、どんどんおしっこが増えていくことへの混乱と、膀胱を広げられる圧迫感、痛み。

しかし、膀胱というのは、かなり伸縮性がある器官である。私はシリンジをさらに押す。さすがに抵抗が強く、なかなか押し込めない。

70まで入れたところで、シリンジは手を離すと押し返されるまで抵抗が強くなった。膀胱にはチリチリとした痛みを感じているはずだ。

「おなか痛いねー。でも、痛いだけじゃないよねー。」

彼女は痛みを訴えてぐずり泣くが、膣口を見れば、そこはトロリとしたキラキラした液体で濡れている。薬の効果もあり、彼女は痛みで、感じている。

膣口に人差し指を当てがい、馴染ませる。赤く充血した膣口から、くちゅくちゅと音が聞こえる。

「膀胱パンパンにされて、気持ちいいの？」

「ぁーたぅー…」

彼女は膣口をいじられる気持ち良さで、膀胱の痛みを忘れたように、いや、膀胱の痛みが快感に変わってしまったように、恍惚な表情をしている。

赤い頬と赤い唇。目を細め、遠くを見つめ、唇からは艶めかしい涎を垂らす。これが生後５カ月の表情だろうか。

人差し指をつぷつぷと出し入れする。出し入れのタイミングに合わせて、彼女は甘い声を出す。中は熱く火照り、ますます潤滑剤が増えていく。

少し指を進ませると、ぽっこりと膨らんだものに指が当たる。膀胱に入っているバルーンカテーテルのバルーンだ。１㎝ほどのバルーンは、膣側に膨らみを表している。この、膀胱の入り口部分の膣側が、いわゆるＧスポットと呼ばれる部分である。

外に飛び出すカテーテルを軽く引っ張ると、「きゃぁぁん」と彼女は大きく声を出す。膀胱ごと外へ引っ張られる感覚が彼女を襲う。内蔵を引きずり出す感覚とでもいうか、彼女は背中を軽く反らす。

カテーテルを何度か軽く引っ張ると、Ｇスポット部分もくにゅくにゅと動く。動く部分を、強めに指で押さえると、彼女は「ぁっ…アァ！」と快感を感じることを声を出して教えてくれる。膀胱からバルーンで、膣から指で、Ｇスポットを板挟みにしているのだから、快感が無いわけがない。

彼女のＧスポットをしばらく堪能してから、ゆっくりと奥に指を進める。子宮口に着くまで指を入れ、子宮に触れると、彼女のお腹がピクンと跳ねた。そこが快感の発生源だと、幼い本能が知らせてい

るらしい。
「ぁ…きゃうぅん…」
子宮を揺らしてやると、甘ぃ嬌声を診察室に響かせた。彼女は目の端から涙をひと粒落とした。
「アっアッぁぶッきゃん！」
子宮をリズミカルに揺らす。彼女の小さな口から次から次へと、規則正しい甘い声が出てくる。彼女の可愛さに勃起したものを触りたくなる。彼女に早くねじ込みたいと、私のものからも涙が溢れる。
「キャぁぁああンッッ」
彼女は足をふるふると震わせ、大きなエクスタシーを迎えた。
彼女からは力が抜け、手足がだらりと落ちる。
膣口から人差し指を抜き、私は彼女の愛液でふやけたそれを、口に含んだ。甘い彼女の味が、口に広がった。

炭酸

次の為に、手をもう一度消毒し直す。

彼女から飛び出るカテーテルのストッパーを外すと、チョロチョロと、彼女の体温で温まった精製水と彼女の尿が混じったものが出てくる。止まるまで待ち、さらにシリンジを使って、膀胱内に残っているものを吸い取る。

彼女は久しぶりの排泄快感に、ホッとした表情になった。

〝プシュッ〟っと音を出して、ペットボトルの蓋を開けた。精製水に炭酸を混ぜただけの、純粋な炭酸水。

トレイに一度移して、軽く炭酸を抜く。トレイの表面には炭酸の泡が付着し、弾けては気体になってゆく。

膀胱の粘膜は、ほとんど粘膜吸収をすることはない。そのため粘膜を荒らすもの以外であれば、入れても問題はない。

炭酸水とは、二酸化炭素を水に溶かしただけのものだ。

ただ、膀胱は、膣のように酸性の分泌液があるわけでもなく、抗菌対策はない。出すか洗うことでしか雑菌を排除することのできない臓器である。そのため、炭酸を抜いたあとは精製水で何度か膀胱を洗う必要はある。

トレイを彼女に見えるようにして説明する。今からこれを入れるよと。

炭酸水をシリンジに吸い上げ、カテーテルに接続する。

「少ーしチリチリするからねー」
３０ｍｌを一気に、膀胱内に注入した。膀胱内では、トレイと同じように膀胱壁に泡が付着し、弾けて、膨張して行く。さらに体温も加わり、膨張は加速する。

炭酸を口に含んだ時と同じか、あるいはもっと強い刺激が、彼女の膀胱を犯していく。

「やぁーーキャァァン！」

彼女は、頭から水を被ったように体を震わせる。膀胱という、痛みや刺激に敏感な臓器に、炭酸という刺激物を強制的に注入される辛さは、想像に難く無い。

さらに２０ｍｌ注入して、カテーテルに再びストッパーをした。カテーテルの中でも炭酸水は気体になり、逃げ場がない体積は、さらに膀胱へと進んで行く。

「ヤァァ！」

彼女はその膀胱への圧迫感と、チリチリとした痛みに声を出す。拘束から逃れようと体を捻り震わせる。

普通、幼児は炭酸が飲めない。粘膜が敏感で、炭酸に痛みを感じるからだ。初めて炭酸を口に含んだ幼児は大抵は、その痛みに炭酸を吐き出す。

幼児にとって、それほど刺激の強い炭酸を、彼女は膀胱内に入れられている。

足を軽く押さえつけ、傷が治りかけのクリトリスに、ふーっと息を吹きかけた。彼女は訳が分からないというように、奇声を出して抵

抗する。

私は彼女の膣口に、薬を大量に付けた人差し指と…中指を、なるべく直径が小さくなるように重ね合わせて挿入を試みる。

彼女がクリトリスを吸引肥大させている1ヶ月の間に、膣の拡張も進めていった。拡張用のブジーを少しづつ太いものに変えて、今は直径２５㎜が入るようになった。

私の人差し指と中指を重ねた、一番太い直径は約３０㎜。この一週間はブジーでの拡張も休んでいるので２５㎜より縮んでいるかも知れない。さらに、今彼女は膀胱側からも膣を圧迫されている。膀胱内の炭酸は今も少しづつ弾け、その体積を増やしている。

幼いつぼみを無理矢理ひらき、二本の指を当てがう。薬を馴染ませ、進めようとするも、本来開くはずのない狭い粘膜。指の先端を受け入れただけで、強い抵抗をしてこれ以上広がらないと主張する。メリメリと音がしそうなほどだ。

泣く彼女の頭を、ゆっくりと撫でる。
彼女は目を薄っすらと開いて、私を見た。

「きゃあぁぁ…ッッ」
彼女の注意がそれた瞬間に、私は二本の指を一気に突き入れた。指には、少しの血液が滲む。

彼女は一瞬痛そうに顔を歪め声を出したが、薬の強烈な効果か、ゆっくりと快感を感じる表情に変わって行った。痛みも残ってはいるだろうが、快感も五分五分という感じだろうか。

彼女の痛みは和らいでも、膣の狭さは変わらない。奥行きもそう無いので、力を抜けば押し返される。

Gスポットの少し奥をぐっと押す。膀胱が圧迫され、バルーンの位置が少し下がる。

彼女が膀胱が押される感覚に、快感を感じ、「ぁぁんッ」と可愛らしい声を響かせてくれた。

ぐりぐりと膣側から膀胱を刺激する。膀胱内の炭酸水は揺れ、更に気泡は弾ける。膀胱をお腹側からもさらに押す。

膀胱は少しづつ大きく膨らんで行き、彼女の子宮までも刺激する。子宮前壁への圧迫を、生後5カ月でこの子は感じている。近いうちに、子宮背壁からの圧迫も加え、快感を感じさせてやりたい。

そろそろ、彼女の膀胱は限界であろう。
私は膣の指はそのままに、器用にバルーンカテーテルの中の空気を抜く。

膣から膀胱を押さえつけながら、カテーテルを尿道から勢いよく引き抜いた。

「…キャァアぁぁぁ…ンッ」

彼女の尿道からは勢いよく、炭酸水と空気が飛び出す。それはシャワーのように診察室の床にビチャビチャと飛び散った。
彼女は恍惚な表情を浮かべ、長い嬌声を響かせながら、絶頂を迎えた。

彼女の頭をゆっくりと撫でると、薄っすらと目を開けた。

「ぱ…ぱぁー…きぃーちー…」

私は堪らなくなり、はち切れそうなものを取り出だす。1億匹もの精子で、彼女の腹から顔までを汚した。

人形

書斎の窓からは、青々とした木の葉が光を浴びて反射しているのが見える。ガラスを一枚隔てた向こう側には、茹だるような暑い空気が漂っているだろう。

この家では、セミの鳴き声もほとんど入ってこない。彼女と暮らし始めてからは外にもあまり出ないので、私はクーラーの良く効く冷えた部屋で、まるで季節感を感じられない生活をしていた。

彼女の「経過観察記録」を打ち終え、窓の外を見ながら、煙草の煙を肺から細く吐き出す。

季節感を感じられないと言えば、私はまだこうして窓の外を見ればいいが、窓ひとつ無い地下室で暮らす彼女は…そこまで考えると、なんだか笑いが込み上げて、私は喉をくっと鳴らした。

着信が鳴る。
アウグストのプロフィール画像は、ビスク・ドールのような青い目の美少女。アウグストの愛娘のフィーリア（ｆｉｌｉａ）と、その弟のカーロ（ｃａｒｏ）がプールで遊んでいるものだ。

虹を見た気分で着信を取ると、窓の外のように鬱陶しい声が聞こえてくる。

「ハーイ？カイドウ、調子はドーオ？」

画面には、白い歯をニカッっと見せて笑う金髪白人の変態医師が画

面いっぱいに映し出される。

「お陰さまで蒸し暑いですよ。」

「HAHAHA、夏ダカラネー。仕方ないヨ。」

椅子をギシッっとならしてアウグストが身を引くと、アウグストの自室の本棚が見え、さらに先ほど見たビスク・ドールの美少女が、アウグストの膝の上にちょこんとまたがっていた。うらやましい。

「やぁ、フィーリアちゃん。また可愛くなったねぇ。あれ、今日は学校はお休みかな？」

ビスク・ドールは、可愛らしい白のレースがあしらわれた服のボタンをはだけさせ、アウグストの大きな腕で背中を支えられながら私を見る。まつ毛の長い目を瞬かせて、画面の向こうの私に向かって小さな赤い唇を開いた。

「はい、皆藤先生。今はもう夏休みだから。」

変態医師に、細い肩に舌を這わせられながら、アウグストよりもずっと流暢な日本語を、フィーリアは喋った。

「そっか、それで昼間から、パパとそんなことしてるんだね」

「はい、あの、パパにご褒美は何がいいかって聞かれて、…皆藤先生とまたお会いしたいって、言ったら、じゃあ自分で、お願いしてごらんって、パパが…」

フィーリアは少し顔を赤らめ、アウグストの胸に顔を埋める。最後

のほうは消え入りそうな声になって行く。
首筋に吸い付いていたアウグストが、フィーリアの白い太ももをパチンと叩き、「ホラ、ちゃんとお願いシナサイ」と厳しいことを言う。しかし、表情と声は柔らかい。
10歳の幼いビスク・ドールは、潤んだ青い目で再び私を見て、「皆藤先生、フィーリアに会いに来て下さい…」とお願いしてきた。
私は意地悪にも、「会いに行くだけでいいの？」とにこやかに返す。
可愛い西洋人形は眉をきゅっと寄せて、おずおずと唇を動かした。
「フィーリアに、き、気持ちいいこと、しに、来て下さい」
時々アウグストの愛撫に反応しながらも、きちんと私に頼む。この頼みを断れるペドフィリアはいるまい。私はにっこりと笑い、彼女の願いを聞き入れた。
その後アウグストと、ああしようこれしよう、ではどんな医療器具が必要になるなと、医者同士の手術前打ち合わせのような会話をし、日取りはアウグストの診察患児がいない3日後になった。

「それでサ、カイドウ」
変態医師は、私と話している最中もいちゃいちゃして、デスクに横になり濡れ光っているフィーリアの性器から舌をはなし、唇を舐めながら喋る。
「娘も連れておいでヨ。その間ホットけないデショウ？」そのセリフにフィーリアが小さくえ？娘？と驚く。
「…あなた、初めからそれが目的だったんじゃないですか？」

「ＨＡＨＡ．僕は別にフィーリアに、カイドウの名前出したりしてないけド？
で、多分、丸一日はかかるでしょう？その間カイドウの可愛い娘は誰がミルクをあげるのカナ～？」
アウグストはニヤニヤと笑いながら私に問いかけてくる。
私が顰めっ面で黙っていると、その会話を聞いていたフィーリアが上体を起こし、びっくりした顔のまま「先生、娘さんがいるんですか？」と聞いて来る。
「えぇ、まぁ…娘というか。まだ赤ちゃんですよ」
フィーリアは「赤ちゃん！？」と嬉しそうに目を輝かせ、両手をパンッ！と叩いた。アウグストは「ネー！見たいヨネー？」とフィーリアを煽っている。子どもの子ども好き良く知っているらしい。おまえの病院は子どもしか来ないところだろうに…。
「皆藤先生！是非赤ちゃんも連れてきて下さい！」
キラキラとした目で私を見るフィーリア。
フィーリアのお願いを一度了承した以上、会いに行かない訳にはいかない。私は拒否をしても無駄だろうなと諦めた。
「まぁ、かなり不安ですが、いいでしょう。アウグスト先生？絶対に彼女に手を出さないで下さいよ。」
フィーリアとアウグストはイェーイ！と手を叩いて興奮していた。
私はため息をもらす。アウグストにいくら手を出すなと言っても、無理なのだ。

あっ、とフィーリアが
「そういえば、娘さんのお名前、なんて言うんですか？」
と、純粋な目で聞いて来た。

過去編　アウグスト先生とビスク・ドール

ボクが奥さんと別れたのは、まだ娘のフィーリアが４歳、息子のカーロが１歳の頃だった。

奥さんは可愛らしい小さな日本人で、僕は奥さんと朝のキスをする時、ずいぶん猫背にならなきゃいけなかった。

当時、僕は腕をかわれて日本の大きな病院に勤めていたが、日本の「ネンコウジョレツ」に馴染めず、病院側とよくトラブルを起こしていた。

アメリカで生まれてすぐに日本に移り、日本で育ったフィーリアは、少しカラダは弱いけれど、心の優しい、いい子に育ってくれた。

奥さんも仕事を再開し、フィーリアを保育園に通わせて数ヶ月。フィーリアは保育園の子ども達から、仲間ハズレにされるようになった。その美しい金髪と青い目は目立った。感受性の強いフィーリアは、周りの子ども達の違和感に、ストレスを感じてしまった。

私はフィーリアに、無理に保育園に行く必要はないと話した。
奥さんはフィーリアを、無理にでも保育園に行かせようとした。

奥さんの気持ちもよく分かった。この日本で、同調して生きられないことがどれほど生きづらいか、僕は身をもって知っていた。娘にちゃんと育って欲しいからこそ、奥さんは保育園にフィーリアを行かせた。

しかし毎朝、行きたくないと酷く泣くフィーリアを見ていられなかった。その顔には時折り影が落ち、ストレスが多い子どもに特有の症状が出てきた。すぐに泣いてしまい、オネショが増えた。

私は決して叱らず、フィーリアの自己肯定感を低めないようにしたが、奥さんには中々理解できないようだった。

――

奥さんは部屋で弟を見ていた。

アヒルのおもちゃが浮かぶ、白い湯に浸かる。フィーリアは僕と向かい合わせにまたがり、抱きついていた。

白いお湯には、僕の胸を伝い、フィーリアの涙が入って行く。たった４歳の小さなフィーリアは、弟を起こさないように声を抑えて泣いている。

「パパ…」

「んー？フィーリア。マタ、頭がズキズキするノ？」

フィーリアは長時間泣くと、よく頭痛を訴えた。軽い脱水のためだ。お湯をすくいながら、細く艶やかな金色の髪を撫でる。お風呂から上がったら、多めに水分を取らせなければ。

フィーリアはうつむき、私の胸板におでこを擦りつける。

「パパは、フィーリアのこと、すき？」

「ふふ、ダイスキダヨ。あたりまえデショ？」

顔を上げたフィーリアは、目と鼻を赤くしている。透き通る白い肌と赤のコントラスト。琥珀色の涙がはらはらと落ちるので、温めた手で、目の下の涙をぬぐってあげる。

「パパ、パパ。ふぃーりあね、パパと、どこか、いきたい…」

「んー？…ジャア、今度パパとママのお休みに、四人でどこか行こうカ。ユウエンチ？それとも、プールがいいカナ」

フィーリアは、頭を横に振って否定する。細い髪の毛からは、冷えた水滴がぽたぽたと垂れ、僕の腕やお湯の中に落ちる。

「パパとね、フィーリアとね。2人がいーの。ママは…ヤなの…」

フィーリアは、僕の唇にキスをして来た。
いつもしているので、驚かずにこたえる。

フィーリアが、なかなか唇を離さないなと思ったら、小さくぬめったものが、僕の唇を開こうとして、慌てて頭をひいた。フィーリアの肩を軽く掴み、距離を取る。どこで、覚えたのだろうか。

「フィーリア、”ベロ”は入れちゃダメダヨ。」

なるべく平静を装って言う。内心、脈が早くなるのを自覚した。

「…パパ……」

フィーリアが、また僕にキスしてこようとする。ちゃぷ、とお湯が波打つ。

なるべくフィーリアを拒否しないように、ゆっくりと頭を引いて離す。フィーリアは縋るような目で、僕を見つめる。

「…ノボセちゃうから、アガロウか」

僕はフィーリアを抱き上げて、湯船から上がった。

―――

奥さんとは、喧嘩が多くなった。僕が院長とソリが合わないことを知って、やっぱりアメリカに居れば良かったとか、日本の風土は僕には合わなかったんだとか。僕は頭を悩ませていた。朝の猫背でするキスも、しなくなってしまった。

喧嘩が増えるに従って、フィーリアはもっと保育園を嫌がるようになった。オネショはほとんど毎朝になって、とっくに卒業したオムツを再び履かせた。朝起きれず布団に包まり、朝食も食べられない。無理矢理食べさせれば吐いてしまい、頭痛や腹痛を訴えた。免疫が下がり、赤い発疹も出るようになった。

ここまで来ると、さすがに奥さんも無理矢理保育園に行かせなくなった。なるべく家に1人にしないように、奥さんや僕が仕事を休んだり、自宅保育をお願いした。それでも、仕事が終わるまで1人にしなきゃいけないこともあって、フィーリアには寂しい思いをさせ

た。

僕とフィーリアが家に2人だけの日。

フィーリアのお昼寝に付き合っていると、何時の間にか僕が眠ってしまったようだ。

寝ぼけた頭のまま、フィーリアを見ると、うつ伏せでタオルケットをかぶっているが、様子が変だった。

頭はこちらを向いてないので、表情は見えないが、身体全体を揺らして、腕は、うつ伏せのお腹の下に隠れている。息遣いは少し荒く、チラリと見えた耳は赤らんでいた。

すぐに僕は、小児自慰だと分かった。ストレスの多い子どもには、良くあることだ。僕の病院の患児にも、ベッドの布団の中でしている子は少なからずいる。

隠れてしているところを見れば、フィーリアは小児自慰に罪悪感を持っている。奥さんに見られて、叱られたことがあるのかも知れない。

これを叱るのは最大のタブーだ。子どもは自分のストレスを何とか処理しようとしているのだから、無理に止めさせるのは一番危険な行為だ。止められない罪悪感を抱かせ、さらに子どもを追い詰める。

僕は寝たフリを続け、しばらくフィーリアを見ていた。フィーリアはずっと同じリズムで身体を揺らし続ける。やがてビクッと身体を痙攣させて、強張った身体から力を抜いていった。肩を軽く上下さ

せ、はーはーっと息を長く吐いている。

４歳というのは微妙な年齢だ。２歳程であれば、子どもが自慰を始めようとした時に気を逸らすことを繰り返し、自然と無理なく止めさせることも出来るし、その記憶は残らない。

４歳やそれ以上の年齢になると、親が気を逸らそうとしているのも察してしまうし、止められたとしても、より恥ずかしい思い出として残る可能性がある。

さらにフィーリアは、すでにそれに罪悪感を持っているし、背徳的な絶頂の快感まで知っている。今から止めさせるのはかなり難しいかもしれない。

小児自慰自体は全く問題ではないと僕は思っている。これを無理に治さないと将来淫乱になるなんて言う頭の狂ったやつもいるが、そんなのは迷信だ。

ただ、これを保育園でしたり、見知らぬ男の前でしてしまった時に、フィーリアはより傷つく可能性があるのだ。

僕はフィーリアの息が整うのを見計らって、上体を起こして、声をかけた。

「フィーリア？起きてるの？」

フィーリアの肩に手をかけると、肩をビクッと揺らしたが、寝たフリをする。

「フィーリア、ソノママでいいから、聞いてネ。女の子がおまたを触って気持ち良くなるのは、おかしいことじゃないんだ。でも、大

切なトコロナンダ。だから、触る時は綺麗に石鹸で洗った手で触ってネ。バイキンが入らないように。それから、お家の中で、１人の時にしか触っちゃダメだよ。いい？フィーリア、人に見られないようにするのは、ゼンゼン悪いコトじゃ、ナイカラネ。フィーリアは、悪くないからね。」

ゆっくり肩を叩きながら、そこまで言うと、フィーリアは薄く目を開けて、こちらを向いた。僕はてっきり、このまま寝たフリをすると思ってたので驚いた。

「パパ、…フィーリア、悪い子じゃ、ないの？」

疑心をはらんだその目は潤み、僕にすがっている。

「うん、悪くないよ。フィーリアは、悪い子なんかじゃ、ないんだよ。僕の可愛い天使は、優しくて、とってもいい子だ。」

フィーリアはわぁぁぁっと泣き出した。フィーリアの中で、ずっと自分は「悪い子」だという思い込みがぬぐえず苦しんでいたのだ。

一通り泣いたあと、甘いオレンジジュースと、甘いクッキーを僕たち2人で食べた。僕が何故、クッキーを食べた後にオレンジジュースを飲むと酸っぱいのかについて解説している頃には、すっかりフィーリアは元気になった。

それから半年後、僕は院長を殴り倒し、病院をクビになった。

僕の友人になってくれた日本人医師達は、院長を殴った奴は初めて

だ。スッキリしたと言ってくれた。院長に似てない飄々とした息子は、また会おうとハグをしてくれた。

奥さんとは離婚した。すでにその話は持ち上がっていたけど、僕のクビをきっかけにあっさりと決まった。職を失った僕には、子ども達の親権は当然のように無かったが、好きな時に会えるので良かった。

それからどうして僕が、子ども達を専門に診る、秘密裏の小児科医になったのかは、僕もよく分からない。ただ、職に困って、半年ぶりに会ったフィーリアにパパ嫌いなんて言われて、割と精神的にキテいたところに、お金持ちの人カラ、依頼を受けたことが始まりだった。始めの依頼は、１３歳の娘と子宮で性交出来るようにして欲しい…だったカナァ。

始めは断って、むしろ依頼者をぼこぼこにしてやろうと考えていたケド、その娘と話してる内になんだか絆されて。それから、何だか変な組織とも関わるようになって、スポンサーも付いて、医療設備も揃っちゃって。

元々、僕にはその素質もあったみたいだった。僕は子どもがとても好きだ。

親愛の情が深くナレバ、実際に手を出すかは別としても、性愛の情も湧いてきてしまうものだと、依頼者が話していた。

まぁ、なんだかんだで収入を得だしたところで、フィーリアが9歳の時に、元奥さんが事故で亡くなってしまった。僕は離婚はしたけど、元奥さんは好きだったから、とても悲しかった。

2人の子ども達は僕が育てることになったが、しばらくは大変だっ

た。元奥さんは、その教育熱心な部分で、ある意味子ども達を押さえつけて育ててしまった。

フィーリアは元々不登校気味だったのが、全く行けなくなり、弟のカーロは、小学校に上がりたてということと、僕と暮した経験が記憶に無いため、環境の変化に不安定になった。

しかし1年後の現在、2人は仲良く学校に行けている。

ただ、フィーリアは少しまだ不安定で、摂食障害気味なのと、僕に依存傾向があること。それから、乱暴な自慰の癖があった。

乱暴な自慰をしているのが分かったのは、フィーリアと暮らし始めて2．3ヶ月後。免疫が下がっているせいで、1度カンジダになったのだ。「かゆい！でもパパ以外のお医者さんなんて嫌だ！！」と泣き叫び、困り果てながら結局僕が診ることになった。

普段は絶対に子どもたちを入れない僕の仕事場…診察室にフィーリアを入れ、チョット改造した産婦人科診察台に乗せた。普通の婦人科ナラバ、患者の顔が見えないようにカーテンがしてあるが、ここには無い。

隣の部屋には患児が1人、手足を拘束されて子宮にラミナリアを入れられて入院してるというのに。

フィーリアの自慰はやはり治らなかったのが分かった。むしろクリトリスを強く引っ掻いたり潰したり、乱暴な自慰になって、僕がそこを見た時には、クリトリスの皮に傷もつき腫れていた。

カンジダによるおりものを除くため、温水器で陰部を軽く洗う。

処女膜には傷は付いてないので、指を入れたりはしてないようだが…この診察で入ることを学んでしまうなぁ。

「フィーリア、中に入れるからねー」

え？と疑問を言う前に、グローブをつけた指を一本挿入する。中をぐるりと確認し、お腹の上から子宮を軽く押す。綺麗な形の子宮で、癒着や腫瘍などもない。ただ、膣は炎症を起こしているため熱い。

指を抜くと、白黄色味がかったカッテージチーズのようなパサパサした大量のおりものが付着する。ＳＳサイズのクスコで中を診ると、小さな子宮口にも大量の白いおりものが付き、ヨーグルトのような強い匂いがする。カンジダ以外考えられないが、一応綿棒でおりものを採取する。

膣内部を洗浄して、子宮口手前に抗真菌性の膣坐薬を挿入する。外陰部にも軟膏を軽く塗り、処置を終えた。

フィーリアは処置の間ぴくりとも出来ずに固まっていた。足の指が開いたまま、顔も不自然に固まっている。

「はい、おわりー。1週間後にまた診るカラネ。その間、おまたはお風呂で洗う時しか触っちゃダメダヨー。フィーリアが好きなココも、触っちゃダメだからカラネ」

「は…はぁい」

電動式の診察台で足を閉じ、通常に戻ったが、しばらくフィーリアは立ち上がれずに、ボーゼンとしていた。

1週間後、もう1度フィーリアの中を覗く。フィーリアの表情は緊張はしているが、先週よりマシなようだ。

中を洗浄すると、ピンク色の膣壁に、少し赤みが残る。炎症はほとんど収まっているが、もう1度、膣坐薬を入れておく。もう1週間もすれば治るだろう。ゆっくりとクスコを抜いていく。

「…ねぇ、パパ？」

「ンー？なぁに、フィーリア？」

「あの…もう、シてもいい？」

フィーリアは自慰をしていいかを聞いている。顔は赤くなって、消え入りそうな声。

「ん？ンー、したいならしてもいいけど…、ちょっと待ってね。」

僕は、子宮と外陰部の解説図を持って来た。どうせ来年、4年生になれば習うのだ。

「イマ、パパがお薬を入れたトコロが、この膣口っていうトコロネ。ココに、将来、男の人のおチンチンを入れて、セイシっていう赤ちゃんの元を出すと、この先の子宮で赤ちゃんが出来る。赤ちゃんが10ヶ月すると大きくなって、子宮から膣を通って出てくる。なんとなくワカル？」

フィーリアは口をぽかんと開けたまま、ゆっくり頷く。これは実際には、分からなくてもいいのだ。自分の身体の大切さを実感させることが、性教育の目的なのだから。

「この膣口っていうのは、何もしなくても、フィーリアみたいに、こうしてよく炎症を起こしちゃうような、とてもデリケートなトコロ。そして、膣口に近いトコロにある尿道やクリトリスってトコロも、汚い手で触ったり、強く触っちゃダメなノ。優しく触るのはイイケド、爪で引っ掻いたり、潰したりしちゃいけない。傷を付けないようにしなきゃいけない。ダカラ、フィーリア、もうココを、乱暴に触っちゃダメだからネ。」

僕はフィーリアのクリトリスを、指で軽く触って言った。フィーリアは何か不満気な表情をしている。

「よくワカンナイカナ？」

「ううん、何となく分かった。でも…」

でも？と、フィーリアの言葉をじっと待つ。

「乱暴に…したいの」

「…ウン」

「…フィーリア、痛いのが…気持ちいいの。痛くしないと、痛くするのが、安心するの…だから、血が出ても、しちゃうの…」

ナントナク、予想していた答えだった。この子には自虐性がある。それを自覚している。フィーリアと同じ、M性を持っている患児を、

僕は診て来た。そして、そのコたちがどうしたらヨロコビ、歓喜の涙を流すかも知っている。

「ねぇ、パパ。フィーリアは、病気なの？
小学校には、フィーリアみたいな子は、居ないでしょう？」

僕は無言で、フィーリアのクリトリスに触れる。フィーリアのクリトリスの皮の傷は、先週見た時から一つ増えていた。触ってはいけないと、言ったのに。

「…フィーリア、パパ、触っちゃいけないって言ったデショウ？でも、新しい傷が付いてるネ。」

フィーリアは、僕の声のトーンが変わり、自分を責めるような口調になったことで、いっきに不安な表情に変わった。言わなきゃ良かったと、後悔でいっぱいだろう。

ゆっくりとクリトリスを撫でる。かさぶたがあるので、なだらかに滑らない。

「フィーリア、ココを剥いたことはアル？」

「、む…く？」

僕はそっと、クリトリスの側面を押さえて、上にひっぱって行く。厚い皮は上に引っ張られ、少しの抵抗と共に、フィーリアのクリトリスはズリュっと剥けた。

「…ッ…パパ？」

何をしているのかよくわからないフィーリア。未知なるものに怯え、混乱が渦巻く。

ピンク色の頭を出したクリトリス。皮との間には恥垢が溜まり、少し匂いがした。

消毒液を染み込ませた綿で、ぐりぐりとクリトリスを拭く。

「ぁっ…ぃぃい゛っ…ッ！」

ビンカンな粘膜にとって、綿はかなり荒い。快楽神経端末が集まったそこには、綿で擦られれば、硬いタワシで擦られたような刺激がある。

細かい部分の汚れが取れないため、細い綿棒に消毒液を染み込ませ、さらに皮とクリトリスの間に差し込み、ぐりぐりと掻き出すように動かす。

私が、始めてここに来た患児に良くする処置である。M性のある患児ならば、ほとんどが濡れ喜ぶ。

そして、フィーリアも、そのぴったりと閉じたスジからは、おりものとは別の、透明な液体を分泌させていた。それはキラキラと光り、涙のようでもあった。

綿棒を止めて、フィーリアを見る。はぁはぁと息を荒くして、ぎゅっと目を瞑っている。

痛いはずなのに、拒否の言葉を発しないフィーリア。手は動かせるのに、僕の手をはらったりしない。

元々、僕には素質があったみたいだった。
親愛の情は、性愛の情になることもあると、僕は依頼者から聞く前に、知っていた。
だから、僕は今、いやらしく欲情している娘の姿を見て、娘以上に欲情している。

フィーリアは、僕のことを愛している。フィーリアはとっくの昔に僕に愛の告白をしている。

Mというのは、基本的に、自分ひとりでは生きられない。誰かに依存し、頼りながら生きることが、一番幸せを感じる。
誰かに管理されなければ苦しみを訴え、管理、支配されることで始めて安定を得る。

そんな、生き物。

「…フィーリア、パパに、飼ワレル？」

それから、しばらくして、いつかハグした男が、同類だと知った。
男はフィーリアを見て、「まるでビスク・ドールだね」と言った。

過去編　アウグスト先生とビスク・ドール（後書き）

どうも、早く結婚して子どもが欲しい皆藤です。こんな私は子どもを持っていいのか疑問です。

時間がないのに、つい書きたくなってしまって、書いてしまいました。アウグスト先生と娘フィーリアのお話しです。

正直番外編を書くタイミングじゃねぇ！と思いつつ書いてしまい、書いたからには公開したくなって…

別の新しい作品として公開するか、ここに書くかは迷ったのですが、せっかくブクマして下さってる方々に悪いなぁと思ってこちらに書きました。

でも話としてはほとんど本編に関係ないので、この小説の番外編として、新しい作品にするかもしれないです。またそれはゆっくり考えますね。

アウグスト先生の話なのに、息子のカーロはいざ何処へ。空気になってますね。

でもいつかカーロ君の小さなあそこやここにズギューン！する話も書きたいのです。書くとしたら新しい作品に移行させて書くと思います。

最近仕事よりこの小説を書くことが楽しくて仕事が手に付きません。怖いです。ずっとペド小説書いてるだけで１０億円くらい降ってこないかなぁ。

診察前

フィーリアに着替えてくるように指示をした。ついたての向こうからはごそごそと、フィーリアが服を脱ぐ音が聞こえる。たまに動きが止まるかと思うと、動きだして服を脱ぐ。ついたての下には１０cm程度の隙間があり、そこをじっと見つめていると、足が片方づつ浮き上がり、下着を抜いたことが分かった。

しかし、それからなかなか動こうとはしない。きっと下着に濡れシミが付いているのを見て、以前、私たち２人に責められたことを思い出し、赤面しているのだ。そしていっそう、幼い割れ目を潤ませている。

「フィーリア？大丈夫？手伝いましょうか？」

冷静な口調でついたての向こうへ声をかけると、「だ、大丈夫です！」と叫ぶように言って、慌ててガウンを羽織って出てきた。案の定、少し顔を赤らめている。

私は黒いシャツの袖をまくり、白い白衣を羽織っている。そんな私をぽおっと見つめるフィーリアを可愛く思いながら、「おいで」と手招きして、ベッドへ誘う。

おずおずとこちらに近づいてきたフィーリアの頭を撫でて、ベッドに座らせる。

「横になって」

言われるままにベッドに仰向けになったフィーリアの顔を覗き込むと、こわばった表情で唾を飲み込んだ。細い喉がこくりと鳴り、緊張しているのがわかる。

「なにをそんなに怖がってるの？こないだも、〝治療〞を始める前に、マッサージしたでしょう？」

そう言いながら、フィーリアの細い手を取って、手のひらを解していく。

細い腕、細い首、膨らみのほとんど無い胸。腹部はへこみ軽く肋骨が浮き出ている。

フィーリアは身長１４５㎝に対して、体重は２８Ｋｇしかない。この子は細く軽い身体に、重いものを抱えている

その重いものを、なるべくほぐしてやりたい。

「緊張して、体温が下がってるね。大丈夫だよ。力を抜いて、ゆっくり呼吸してごらん。…そう。」

冷えた手のひらを温めるように握りながら、細く白い太ももに触れる。そのまま手をガウンの裾から中に入れ、敏感な部分に着く直前に離していく。フィーリアは期待を裏切られ少し寂しそうな顔になる。

足首まで指先が届くと再びゆっくりと膝へ上がって行き、鼠蹊部をぐっと押し込むと、「ふ…う」と吐息を漏らす。

ガウンの紐をするりと解いて左右に開くと、ほとんど脂肪がついて

ない細い身体があらわになる。

「あ……ッ！」

とっさに胸を隠そうとする手をパッ掴み、シーツに縫い付ける。赤みが増した頬を、人差し指ですっと撫でれば、フィーリアは恥ずかしさからか、目をぎゅっとつぶった。

「力を抜いて。余計なことは考えないで。体の感覚だけに集中してごらん。何も考えずに、素直に反応しなさい。」

「ぁ…」

指先を、筋張った首筋から肩におろし撫でていく。ヘソまでたどり着くと、ヘコんだお腹に手を当てた。私の暖かい手のひらで、フィーリアの冷たいお腹を温めていく。ゆっくりとさすり、子宮まで熱が届くように、軽く押し付ける。

「あったかいでしょう？ここが子宮です。子宮が十分あったまってから、診察室に行きましょうね。」

診察室という言葉を聞いた瞬間、手のひらに軽い振動が伝わる。

洗面器の中で温めておいたアロマオイルを、ヘコんだお腹にトロトロと垂らす。酸素に触れ温度が上がるそのオイルを、手のひらで軽く伸ばす。アロマの香りがふわっと広がる。フィーリアはとろんとした目になった。お腹をゆっくりと揉み込むうちに、オイルは肌に浸透していき、子宮にはゆったりと血液が流れ込み、筋肉を柔らかくしていく。

ぺたんこで、肋骨の浮き出る小さな胸を、アロマオイルのついた、大きな手のひらで包み込む。オイルの艶が胸に移り、薄い胸がてらてらと光る。柔らかく両胸を撫で上げ、人差し指でピンク色の小さなボタンを軽く擦る。触れるだけの弱い刺激を何度も与えると、フラットだった胸に、ボタンが浮き上がった。

「硬くなってきたね。刺激に反応してる。」

「ん…せんせ…」

呼吸のたびに上下する胸を、壊れ物を扱うようにそっと掴む。五本の指先をすぼめていき、その中心に集め、上へ逃す。血液がどんどん流れ込み、薄いピンクだったボタンが、濃いローズピンクへと変わり、丸く大きくなっていく。

立ち上がった敏感なボタンを、二本の指でキュッとつまむ。フィーリアが強い刺激に身をよじる。

「んっ…」

「痛い？」

「…はぁ…痛くは、ないです…」

つまんだ指をクリクリと動かすと、喉をそらして吐息を漏らす。首筋から肩、わき腹と、オイルを全身に伸ばしていく。

再びお腹に手のひらを当てれば、先ほどよりもお腹の体温は上がり、私の手のひらとそう変わらないほどになっている。くくっと子宮を押し込むと、「ひぁ…」と声をだして全身を震わせた。

下腹からワレメのギリギリまで降りると、ワレメを避けるように、鼠蹊部を通り太ももへ降りる。お尻の方へは、フィーリアが待ち焦がれている証の愛液が垂れ、シーツを汚していた。

「ふふ、かわいいフィーリア、いけない子だね」

「や……ぁ……」

どんどん敏感になっていくフィーリアを、うつ伏せにさせる。引っかかっていたガウンを脱がせ、生まれたままの姿にする。

背中まで伸びた髪を左右にはらうと、浮き出た肩甲骨が二つ。その間の背骨に沿って、オイルをとくとくと垂らした。オイルは背中の形に沿って垂れていき、肋骨のくぼみに流れ、シーツに吸い込まれていく。

背骨からオイルを伸ばし、肩甲骨の形を確かめるようにそれぞれ包み込む。くるくると回転させながら撫でた。首の下に手のひらを当てて、再び温める。ここが緊張していると、いつまでも力が抜けない。温まるにしたがって、血管が少しずつ広がり、血の巡りが良くなっていく。

「フィーリア、気持ちいいでしょう？」

「……は……ぃ……んン」

力が抜け充分に温まったことを確認し、もどかしいほどゆっくりと、背骨に沿って手のひらを下げていく。

「あ…ぁ…ん…」

背中と腰の中間あたりまでくると、フィーリアはリラックス的な快感とも、性的な快感ともつかない甘い声をだす。綺麗な曲線を描く腰の辺りまでくると、首をそらして吐息をはいた。全身が敏感になっている今は、どこを触っても反応する。

「フィーリア、今、軽くイきましたね。」

「や、ちが…」

「違わないでしょう?先生には全部お見通しなんですよ。あなたがついたての向こうで下着にシミがあるのを見て顔を赤らめていたのも、診察という言葉を聞いて、酷く濡らしたのもね。」

「や…ぁぁ…あ」

薄いが柔らかな臀部の谷間にぐぐっと力を入る。指先を尾てい骨にひっかけながら、何度か往復する。そこにはオイルではないヌメリが加わり、いやらしい香りが広がった。

「あふ…ン」

「フィーリア、分かる?君のヌメりの香りがしますよ。」

「…ぁ…ふ」

夢うつつに力が完全に抜けているフィーリアを、いったん起き上がらせる。

私もベッドに上がり、フィーリアの背中を包むように座り、抱き寄

せる。

「私に背中を預けて。力を抜いて、もたれかかりなさい。」

フィーリアの後ろから手を回して、細く華奢な体を抱きしめる。しばらくそうしていると、力の入らないフィーリアは、仕方なく体重を預けた。

「そう、いい子だね。」

フィーリアのつむじにちゅっとキスする。フィーリアの香りと、シャンプーの香りが入り混じり、鼻腔を刺激した。

「ぁ…」

抱きしめていた手を緩め、左手を薄い胸に当てる。右胸の外側から、ピンクのグラデーションが濃くなるほうへ指先を滑らせる。きゅっと強めにボタンを摘むと、「あぅ…ハァッ」と堪えるような声を出す。

「我慢しないで。自分を解放してごらん。ここだけでいいの？他に触って欲しいところは？」

耳元で囁くように喋る。息が耳をくすぐり、フィーリアが身をよじる。

「は…せんせ…やぁっ」

「嫌なら、今日の診察はやめにする？」

首を大きく振りイヤイヤをする。

「じゃあ、どこを触って欲しいの。先生の手を持って行ってごらんなさい。」

私の右手をフィーリアの前に出す。おずおずとフィーリアは私の指を掴み、下ろしていった。同時に自ら細い足を開き、私の指を掴んでない方の手で、無毛の秘部を広げた。ゆっくりと指はフィーリアの秘部に到着し、私の指先はクリトリスにグッと押し付けられた。

「ふふ、ここですね。あなたが好きなところは。」

耳元でそう囁かれたフィーリアは、それだけで身体を震わせイってしまう。１０歳にしては大きく肥大しているクリトリスをキュッと摘む。

「あっ…ひぃん…いっ…」

「またイッちゃったね。」

「や…言わ…やぁぁ」

親指と人指し指で摘んだクリトリスをくりくりと揉み上げる。待ち焦がれていた快感がやっと与えられ、フィーリアは喉を反らしてイき続ける。身体は完全に私にもたれ、足は開きっぱなしで、手は私の白衣をぎゅっと握りしめていた。

「もっと気持ちよくなりましょうね。」

そう言って、フィーリアのだらけた足を、私の膝を立て軽く開いて

いる足の外側へそれぞれ持ち上げる。フィーリアは先ほどよりずっと足を大きく開き、いやらしい格好になった。

左手でそっと、ぐちゅぐちゅに濡れそぼる幼いワレメに手をかける。クリトリスの側面にグッと指を二本押し付け、上へ引き上げた。クチュっ音を鳴らしながら、可愛らしいピンクのクリトリスが顔を出し、ヒクヒク動いて私を誘っている。

「すっかり勃起していますね。アウグストに…パパに大きくしてもらえて、よかったですね。触りますよ。」

「や…やぁ…」

恥ずかしさに身をよじろうとするフィーリアだが、後ろからカチリと固められた格好にその余地もない。

人指し指で軽く、その敏感な先端をすっと撫でる。

「ヒッ…きゃぁぁん…あぁっ」

それだけでフィーリアは今までよりずっと強い反応を見せた。

人指し指を何度か先端を往復させる。敏感な突起はその刺激をくまなく感じ取り、快感を脳に送り込んでいる。

「や…やぁぁぁ！だめっ！…へんになる！へんになる！」

「いいんですよ。へんになって。今日は、あなたが、イき狂う日なんですから。」

「あぅっ…あ、ヤァァァァ！！」

クリトリスをきゅっと爪を立てて摘んだ瞬間に、フィーリアは深い絶頂を迎えた。全身がビクビクと震え、呼吸が止まりかける。

気を失いそうになるフィーリアにキスをして、身体のオイルを暖かいタオルで拭いた。

「診察室にいきましょうか。アウグストがお待ちかねです。」

そう言って私は、力の抜けたフィーリアを抱き上げて、診察室への扉を開けた。

「きゃーアっ！」

彼女を高く抱え上げると、彼女はきゃっきゃっと嬉しそうな声を出す。私に最高の笑顔を見せてくれる。１０回ほど高い高いを繰り返したあと、抱え上げたまくるくると部屋の真ん中で回ると、再び彼女は「ぱぁーッ！！」と高い声を出して喜んでくれた。

さっきまで甘い嬌声を響かせて絶頂に達していたのに、今ではすっかり遊ぶことに夢中になっている。彼女にとって、遊ぶことも、ミルクを飲むことも、私の指やブジーとセックスすることも、日常の一部であり、なんらおかしなことでは無い。

彼女はその日の絶頂の深さにもよるが、達しても、気を失なったり、失いそうになることは減った。体力が付いて、余裕が出るようになってきた。

通常５ヶ月にもなると、感情も多く芽生えるし、好きなおもちゃ、嫌いなおもちゃも出てくるし、不満も訴える。それぞれ個性が芽生え、すでに、かなり人間らしい生き物になっている。寝返りをうち、おもちゃを自分で掴み遊べる。１日に眠る時間は短くなり、起きている時間は長くなってきた。

おまけに彼女は私の話しかけの効果か、いくつかの意味のある言葉も喋れるようになった。「きもちいい」「いや」「ぱぱ」は比較的

はっきりとしゃべる。物に名前があることも、少しずつ理解して来た。

しかし、彼女には名前がない。先日フィーリアに名前がないなんて変だと言われたが、私は、今後付けるつもりもない。

名前なんてものは、それを示す記号でしかない。識別ＩＤにすぎない。製造番号、シリアル番号。アドレス。

彼女はこれからも、名前さえ付けられない存在として、育ててゆく。

彼女は彼女だ。私がそれを、認識出来ればいい。

私はそう考えながら私はアウグスト邸に向かった。

―――

ビスク・ドールは白く美しい。

「ぁ…かいどぉせんせ…ふぁ」

いつも画面越しに見る診察室が目前にあり、産婦人科診察台には患児ではなく、フィーリアが括り付けられている。

先ほどたっぷりと敏感に仕上げた身体は、多少は回復したものの、まだ力は入らない。

私は小さく柔らかな唇を堪能している。身動きの取れない頭を両端から持ち、頭側からキスをする。フィーリアの鼻にかかった声が、

私の首元にかかる。

「ジャア、僕はシェリって呼ぼうカナー」

アウグストは万能壺から綿球を取り出し、フィーリアの強制的に大きく開かれた敏感な部分を拭いていく。そのカチャカチャとした器具の音と刺激で、フィーリアとキスをしている私の舌に、ビクビクと振動が伝わってきた。舌を離すと、銀色の糸が引いた。

「ん…日本人にフランス名ですか」

「HAHAHA、フィーリアなんてラテン語だよ？イタリア系アメリカ人と日本人のハーフなのに」

「シェリは犬の名前でしょう」

「だからイインデショ？深く愛される者、愛しいモノ、意味もピッタリ」

フィーリアの真っ白く透き通る肌。乳首はまだ薄っすらとしか色が付いていない。下着などの色素沈着などもない。全くの無垢な白。頬はうっすらとピンク色に染まっている。私との深いキスのせいか、これからされることへの期待からか。薄く唇を開いて、浅い呼吸をしている。

「では、フィーリア、今からキミの診察を始めます。今からグリセリンを入れマスカラネー。スコーシ苦しくなりますヨー」

「んぷ…はぁい」

いるようだ。

アウグストの口調が「小児科医」になる。まるでごっこ遊びをしている

アウグストが、腸内洗浄用イルリガードルをスタンドに吊るす。中には５００ｍｌの薄めたグリセリン。イルリから垂れるゴムチューブの先にワセリンを塗り、フィーリアの肛門にも塗り込んだ。

ちゅぷんとゴムチューブが直腸に入る。アウグストは中のバルーンを膨らませるポンプを押すと、もうフィーリアがいくら排泄したくても、こちらが許可をするまで出すことは出来なくなった。

チューブのストッパーを外すと、イルリの中の冷たいグリセリンがゆっくりと腸に流れ込む。赤い唇からくぐもった声が漏れ、眉が寄る。

「１回目は１５分我慢ネー。キレイになるまでシマスヨー」

アウグストはピピピピ…と１５分のタイマーをセットする。フィーリアは腸内洗浄が苦手だ。そもそも、拒食症である子どもの内臓許容量は少ない。５００ｍｌのペットボトルを一気に腸内に受け入れるのは非常に苦しい。

3分程の時間をかけて、イルリガードルの中のグリセリンがフィーリアの腸内に入りきった。凹んでいた腹部が軽く膨らみを描く。陰部の正面の椅子に腰掛けたアウグストは、大きな手で、膨らんだお腹をのの字で撫でさすっていた。

「ふ…パパぁ…おなかっ…イタぃ」

入れた直後から痛みを訴えていたフィーリアだが、５分もすると我慢の限界が来る。

「痛いネー。もうチョットで出させて上げるからネー。ガマンだヨー」

私は痛みを散らすように、フィーリアとキスをしながら、ピンクに染まった耳に指をゆっくりと這わせ、時に乳首を抓った。腹痛に耐えながらも、私達の愛撫にしっかりと反応するフィーリアが可愛くて仕方ない。

ピーっとタイマーが鳴ると、フィーリアは待ちわびた排泄感覚にほっとした顔になる。排泄はゴムチューブを通してそのままできる。肌には薄っすらと汗をかいて、その苦痛が想像できる。いったんは楽になったが、再びイルリガードルが交換され、腸内はまたいっぱいになった。タイマーは５分にセットされる。

グリセリンによって水分とミネラル、それから体温を奪われた腸に、再びそれらを与える為に、イルリの中身は生理食塩水を３７。に温めたものに変わっている。そのアウグストの愛情に、フィーリアは気付いているだろうか。

同じ処置をさらに3回、つまり5回の腸内洗浄をして、出てくる生理食塩水が透明になり、大腸内が空になったところで、ゴムチューブを抜いて肛門を再び消毒する。

フィーリアはすでに、白い肌にしっとりと汗をかき、鳥肌が軽く出ている。しかし、これはまだ準備すら終わっていない。今から行うことの為には、腸内は空っぽにして激痛で漏れないようにしなければならない。

しばらくの休憩ののち、場所を交代し、アウグストは準備を。私がフィーリアの陰部の前に座った。

胸の中央から子宮の上あたりまで、ゆっくり中指を滑らせると、フィーリアはビクビクと腰を浮かせ、太ももをわななかせた。すっかり感度が上がっている。

「ではフィーリア、診察しやすいようにしていきます。多少違和感を感じますが、我慢して下さいねー」

私も「小児科医」のふりをする。これは、あくまで「診察」なのだ。

サージカルテープで、大陰唇をそれぞれ外向きに貼り付ける。小陰唇も同時に引っ張られる。最後に、勃起しかけたクリトリスの皮をズルリと剥き上げ、テープで固定した。１０歳にしてはやや大きめのピンク真珠が姿を現し、ヒクヒクと息づく。

ギュィィィイ

その音がしたとたんに、患児はこちらをハッと見た。あの歯医者のタービンの音を鈍くしたような、激しく振動する音。

私は手に、そのタービンを持っていた。ただ先端は、歯医者の歯を削るような鋭いダイヤではなく、丸みを帯びた３㎜ほどのゴムシリコンだ。そしてこれは回転するのではなく、振動する。

「…ヤ」

「フィーリア、こわくないですよ。今からここに、刺激がありますす

からね。辛かったら声を出してもいいよー」

ギュィィゥ゛ヴ゛ヴ゛ーー

…バグン!!　!!　…っとフィーリアの体が跳ねた。まるで除細動器（Ｄｅｆｉｂｒｉｌｌａｔｏｒ）の電気ショックが流れた時のように。跳ねる腰を追いかけるように、タービンを陰核に押し当てる。

「や…やぁぁア…ッッ!!　」

ウ゛ヴ゛ヴ゛…と低音が響き、それはそのままフィーリアの陰核へと響いていく。その刺激は快楽神経端末から背骨の太い神経へと電気信号が高速で移動し脳へ達する。

「はい、フィーリア、動かないでねー」

快楽神経の塊である陰核を高速で研磨する刺激は、陰核好きのフィーリアにはたまらない快楽だろう。デンマの快感をピンポイントに濃縮したその刺激。

「きゃ…きゃぁぁん、ダメっかいどぅせんせぇ…」

「どうかなー？この刺激は、どんな感じがするかなー？」

「ふぁ…ァァアア、き、きもちぃ…すき…すきぃぃぃ!!　」

「じゃあ、もう少し強くしますよー。頑張って意識を保ってねー」

ーーギュイィィイ

キャァあぁあぁ゛！！？と、抉り出すように声を出す患児は、手足を必死に捻り強すぎる快感に逃げようとする。カチャカチャと拘束具が鳴り、細い足は筋張り、足の指は開きっぱなしになる。しかしいくらもがこうとも、手足は診察台にきっちり拘束され、逃がれることは不可能だ。

「ァッ！？あ…イクいっちゃう…イっちゃァーーっ！！」

１０分ほど、そうして陰核をタービンで刺激することにより、フィーリアは5回ほど絶頂に達した。膣口から白い子宮頸管粘液が溢れ、陰核は赤く充血し勃起している。

息は絶え絶えになり、脈がひたすら早い。
ぁ…ぁ…と朦朧とした声を出し、身体を痙攣させる。
見るとアウグストは、その娘の姿見て、とても愛おしそうな顔をしている。アウグストはフィーリアの耳元に近付き言った。

「フィーリア、ヨク頑張ったネー。デモ、フィーリアには今からもっと凄い、死んじゃうカモッテ思う激痛と快感を体験させてあげるからね。気絶しチャッテも、狂っチャッテも、壊れちゃっても、絶対に止めてあげないカラネー」

フィーリアはその言葉を聞きながら、膣口から、さらに白い頸管粘液をドロリと溢れさせた。

拘束

フィーリアには、自信がない。通常の子どもの多くが持っている、自分が自分であっていいという自信。自分らしく生きるための自信。自己肯定感。それがない。そのため、フィーリアは、自分は自分であってはならないと思っている。自分はいやらしく、悪い人間だから、罰を受けるべき人間だと。

精神病の治療には長い長い年月がかかる。小児摂食障害、小児鬱などは、本人が処理出来るストレス量を超えると起きる。周りへの敏感さと、自分への鈍感さ、周りの環境などで強い負担がかかる。

敏感な人間に周りの普通を求めてはいけない。足を骨折している人間に普通に歩けと言って、歩けないのと同じように、敏感な人間にはそれなりの配慮が必要になる。

しかし周りは普通を求めるのをフィーリアは敏感に察し、自分の感じる骨が折れた激痛を感じないようにし（自分への鈍感さ）、足を引きずって歩いてきた。すぐに疲れ果て歩けなくなるが、周りの人がどう思うかを不安に思い、這いつくばってでも普通に見せる。繊細で優しすぎる、子ども。

一番フィーリアが押さえ込んでいるものは、性的快楽と感情。母親に否定され抑圧されたそれは今でも、「いやらしい自分は嫌悪される」という恐怖として残っている。その恐怖からのストレスを自慰で誤魔化し、再び自慰をしてしまう自分を嫌悪することを繰り返してきたフィーリアは、自分を罰するように、敏感な部位に傷をつけて来た。

アウグストは、そのストレスを除こうとしている。そのままのフィーリアを愛しているのだと必死に伝えている。フィーリアがいやらしい自分を否定するたびに、いやらしさを引き出し、そのフィーリアを愛する。

フィーリアが自分を罰し、いい子になれると思うならば、その希望通り、悪いフィーリアには罰を与え、フィーリアが満足するまでいい子にしてあげようとしている。

実際には、アウグストは、例えフィーリアが殺人を犯そうとも、フィーリアを愛しているだろう。しかし、フィーリアのいい子でいたい願望を叶えるために、あえて、悪い子のフィーリアは愛さないというポーズをとっている。

いつもの依頼のように金が入って来るわけではないこの調教。もし世間にバレれば、愛するフィーリアまで傷つきかねないリスクを負いながら、アウグストはフィーリアのために、フィーリアを犯している。

これを理解できる人間が、世間に何人いることだろうか。

「いくよー」

バチンッ!!

鋭い音が診察室に響いた。

「きゃぁぁぁッ！?！いたいイタイイタイ！！せんせぇぇ！！」

フィーリアのその言葉を無視して、再び「バチンッッ！！」と鋭い音が鳴ると、「キャァァァ！！」と鋭い悲鳴が鳴る。

フィーリアの白く柔らかな大陰唇を、クリップで挟んだ。目玉クリップなどよりも強いバネを持つ強化プラスチックのクリップは、手術中に血液が滲む臓器なども、滑らずに挟み込み離さない。

クリップにそれぞれ、ワイヤーを通し、左右に引いていけば、普段大陰唇と小陰唇に守られた、そのピンク色の粘膜は、華が咲くように広がっていった。そこはてらてらと光り、膣口から白い粘液が垂れている。尿道口もはっきりと見え、陰核の皮も真横に広がっていき、陰核と皮の間には空間が出来た。クリップから伸びるワイヤーを、診察台横から上に伸びる凸字のパイプに引っ掛けると、もうそこは戻らなくなった。

フィーリアは、イタイイタイィ！！と喉の奥から叫ぶ。タービンでの刺激の時には腰をよじり必死に逃げようとしていたのが、今では逆に、足先が軽く痙攣するのみで、全く動こうとはしない。わずかでも動けば、さらに強い痛みが走ることを、フィーリアは分かっている。

フィーリアの拘束は最低限しかしていない。両手首と足のふくらはぎを拘束しているだけで、骨盤を固定するような拘束はしていない。身をよじることは可能なのだ。

しかし、此れ程強いクリップで大陰唇を挟めば、フィーリアは自分で身体を動かすことが、さらなる激痛を産む。

拘束をせずとも、フィーリアはもう、金属の輪にカチリとはめられたように動けない。人間を動けないようにするのに、拘束具は必要

ない。

「イタイネー、イタイネ、フィーリア。」

アウグストが、フィーリアの頭を、両側からはさむようにして、話しかける。

「もう、ジンジンするようなレベルの、イタミじゃないヨネー。小陰唇に、針を刺された時なんかヨリも、強烈なイタミが、性器全体に、広がってルヨネー。」

言葉の魔術師のように、フィーリアに、催眠を、かけるように。

「イタい…いたい…い…」と、うわごとのようにつぶやくフィーリアの、耳の中に息を吹き込むように…

「イタイネ、イタイネー？フィーリア、

──デモ…スゴーク、〞キモチイイ〞ヨネ？」

フィーリアが、ゾクリと背中を震わせた。

フィーリアの美しかった顔は、今は赤く染まり、涙とよだれでぐちゃぐちゃになっている。その顔をアウグストは、愛おしそうに見つめ、おでこにキスをした。

カチャ…という、私がピンセットを取る音で、フィーリアは涙目で、ゆっくりと、自分の陰部を見た。

「フィーリア、引っ張りますからねー」

タービンの刺激により勃起した陰核は、痛みで少し縮んでいた。その陰核をピンセットで掴み強く引っ張ると、フィーリアは再び、あらんばかりの声を張り上げる。

指の腹で撫でるだけでも強い刺激がくる陰核を、毛を抜くほどに強くはさむ力がある、ステンレス製の冷たいピンセットでがっちりとはさみ、上へ引き上げる。神経の塊である陰核がピンセットに挟まれ、両側から潰された形になる。

引っ張られたことで、フィーリアの陰核は奥に身を潜めている部分までも、ずる…とわずかに引き出され、１０㎜ほどの長さになる。

「ギャァァぁぁぁあァ！！」

フィーリアは頭をぶんぶんと振り乱す。喉が震え、目が大きく見開かれる。

私がピンセットで掴み引っ張った状態のまま、アウグストが二枚の小さなステンレス板で、陰核の根本を挟んだ。板には蝶ネジが２本通してある。蝶ネジをキリキリとゆっくり締めていく。すると二枚の板の隙間は狭まっていき、それに比例して、フィーリアの叫び声は獣の叫びに似通っていく。やがて長く伸ばされた陰核は細い板に挟まれて、ピンセットを外すと、その先端だけを攻めることが、容易に出来る形になった。

2枚の板の間には、１㎜ほどの隙間しかなくなった。板の穴に糸を通して、大陰唇のクリップと同じように、上部のパイプに糸を引っ掛けた。陰核は板ごと上に持ち上がり、2枚の板に挟まれた陰核の根元側は、薄っぺらくなり、板の上側の陰核はぷっくりと膨らんでいる。

赤く充血し半円を描く陰核の先。今はまだ、赤い色を保っているが、このまま数十分すれば赤紫色に変色していく。

サージカルグローブをつけた、渇いた指で、可愛らしく膨らんでいる陰核の先を、ゆっくりと撫でた。

「…ぁ…ッ」

フィーリアから、切なげな声が漏れる。

少しも動けない激痛の嵐の中で、わずかな快感をフィーリアは見つけ、その深い感性で感じ取っている。

ずっと緊張で筋張った細い太ももを、手の甲で撫でると、「あぁ…！」と、かすれた声が聞こえ、１秒後には「ひゃイィ！」と悲鳴も上がる。思わぬ場所の快感に、フィーリアは足を動かし、激痛を自ら生んでしまった。その可愛らしさに、笑みがこぼれる。

アウグストが、代わって、と合図する。アウグストの手には、銀色の光沢を放つクスコが握られていた。

拘束（後書き）

どうも皆藤です。最近遅筆の皆藤です。いやぁ、自動書記のように動いていた指先が、なんだか動かなくなってきました。別に飽きたとかではないですよ。書きたいんですよ私も。あぁ幼女かわいい。

感想や評価ありがとうございます。ものすごく嬉しいです。こうして細々とでも書けているのも、みなさまのおかげでございます。

さて「小児科医による乳児飼育」の更新も亀になってるのに、何故か別のお話がちらほら思いつくようになりました。長くしっかりとしたのが思いつくんじゃなく、一場面が頭に浮かんでそこからちょっと妄想を付け足すような。思いつくからには書きたくなりまして、短編集的なものを作ってみました。

小説タイトル「小児性愛者」です。多分この作者の他の作品からいけます。

これは思いついたらメモ的に書くだけなので、「小児科医による〜」よりももっと更新速度は遅いです。髪の毛が伸びるくらいの速度です。話の内容もそんな濃くないです。

「小児科医による」の番外編というかチラッとなんか出てくるような話も考えてます。期待はしないで下さい。

というわけで、よければ「小児科医による乳児飼育」と共に、「小児性愛者」もよろしくお願いします〜

「ネーフィーリア？コノマエ、ココの中の〝検査〟をシタ時のコト、カイドウに教えてあげナサイ。」
アウグストはフィーリアの膣にクスコを入れて、ネジをキリキリと回し、全開大まで開いて行く。フィーリアは少し苦しそうな顔になる。

「へぇ、フィーリア、どこの検査をしたの？」
私がそう尋ねる。
今まで受け身でよかったフィーリアは、いきなり自主的に話をしろと言われ、慌てていた。
アウグストはフィーリアの陰核を挟み吊るしている糸を、ピンと弾くと、フィーリアはアァ！っと悲鳴を出した。

「ホラ、チャンと話シナサイ」
アウグストに促されて、フィーリアはおずおずと口を開く。
アウグストはフィーリアの開かれた足の間で、子宮口に細いブジーから順番に入れていた。

「あ、赤ちゃんを作るトコロの…」

「うん、子宮の？」

「…子宮の、中がどうなってるか、レントゲンを…撮って、確認するケンサ…をしました。」

「それはすごいねぇ。子宮だけ？それとも、卵管もかな？」

「え？…えっと…」

フィーリアが質問が分からず、アウグストを見る。アウグストは「卵管もダヨー。あと油性ダネ。」と代わりに答えた。

子宮卵管造影検査。通常、不妊治療をしている婦人に対し、卵管の通過性を調べる検査だ。子宮の形態を確認したり卵管が詰まっていないかを確認する。水性と油性の2種類の造影剤があり、粘性の高い油性のほうが圧倒的に痛みは強いが、卵管を綺麗に広げられるため、検査後の妊娠率（精子が卵子に辿り着く確率）が非常に高くなる。

普通は不妊治療の目的以外ではしない検査だ。ましてや、１０歳の患児になど、よほどの病気でない限りはない。

「フィーリア、じゃあその検査は、どうゆう順番でやったのかなー？」

「えっと…」

その時を思い出して、フィーリアの顔が歪む。泣き出しそうだ。

「…クスコで、開いて…」

「うん。膣を広げて、パパに中まで見られたんだね。それから？」

「…ぶじーを、し、子宮の入り口に入れて…広げました。」

「何㎜からはじめて、何㎜まで入れたの？」

「えっと…５㎜から、１㎜づつ順番…に、１５㎜までです」

鬼畜だ。

「うん、子宮頸管を１５㎜まで広げられたんだね。痛かった？」

「…は…い」

アウグストは会話を聞きながら、ニコニコとした顔で、フィーリアの子宮口へ、ブジーを入れて拡張していく。動作はゆっくりとしているが、ブジーが太くなるにつれて、フィーリアは顔を歪める。しかし、クリップで固定された大陰唇と、板に挟まれた陰核のせいで、ほんの少しも身をよじることは出来ない。

「ブジーで拡張したあとは？」

「…５㎜の…らみなりあ？…を、３本、入れました…」

「うん、ラミナリアを入れて…それから？」

「３時間、そのまま待って、膨らむのを待ちました…」

ラミナリア桿（Ｌａｍｉｎａｒｉａ　ｔｅｎｔ）とは、棒状の子宮頸管拡張器である。コンブの茎根を原材料とし、水分を含むとスポンジのように膨らむ。出産時になっても子宮口が充分に広がらない妊婦に分娩の誘発の目的で使用される。また人口妊娠中絶の手術前や、子宮内膜掻爬、この子宮頸管造影検査にも稀にだが使われる。

「それは痛かったね。ラミナリアを抜いたあとは、どうしたの？」

「…子宮に、バルーンカテーテルを入れて…風船を膨らませて、子宮から造影剤が漏れないようにしました。…これが、すごく、痛かったです…」

最新の子宮卵管造影検査は、子宮内でバルーンを膨らませる。その方が痛みは少ない。しかしアウグストは恐らく、旧式の、子宮頸管内でバルーンを膨らませる方式をとったのだ。通常バルーンを膨らませる量は２ｍｌほどだ。しかしラミナリアで広げたと言うから、恐らく直腸用の大きな３０ｍｌのバルーンを使用しなければ、子宮頸管から造影剤の露出は防げないだろう。アウグストはそれを使ったのだ。

「バルーンが固定出来たら、少しずつ造影剤を入れて行って…何度か…ッ、レントゲンを、アッ、撮りました」

アウグストの持つブジーが、どんどん太くなる。

「造影剤が入っていく様子は、フィーリアは見てたのかな？」

「は、い…モニターで、写って…あィッ…わ、私の、子宮の形も、卵管の糸みたいな形も…見えました。ア…アァァっ！…だ、だんだん、子宮が大きくなって、行くのも…でも、泣き叫ぶくらい、痛かっ…いぃッ」

油性の造影剤を使った子宮卵管造影検査は、痛みに強い大人でも泣きじゃくる場合もあるほど痛む。終わったあとにも１日から２日は痛むことがある。抗生物質も３日程度は飲ませる。

アウグストは、２５㎜のブジーをフィーリアの子宮頸管から抜くと、こちらを見た。

「ソノトキのゲキツウで、フィーリアは気を失っチャッテネー。まぁ、充分に入れてもマダ入れたカラ、当然ナンダケド。」

そんなことをケロッと言って、私にその時のX線写真を渡してきた。…この写真を、通常の小児科医や産婦人科医が見たら、卒倒しそうだ。

フィーリアの子宮頸管は無理矢理広げられ、直径３０㎜ほどはあろうか。子宮には造影剤を規定量以上に注入されて、ぱんぱんに膨張させられている。子宮に亀裂が入る直前だろう。

全ては今日の準備の為に。

「アウグスト、これをしたのは何日前ですか？」

「４日前。カイドウに連絡スル前日カナー。その検査にちゃんと耐えられたカラ、ゴホウビ何がイイ？って聞いたんだヨ」

アウグストという男は恐ろしい。私も大概だが、この男は、どこまでしたら患児が〝死なない〟かの見極めがすごい。

成人してない子どもは、その年齢や体型に応じてかなりの「量」の違いがある。患児の限界はどこかを観察し見定める能力に、アウグストは抜きん出ている。

死なせず、限界までの調教。

「ジャア、フィーリア、マタ今日もラミナリア入レルカラネー」

アウグストの宣告に、フィーリアは恐怖で固まる。その固まった顔をほぐすように、アウグストはフィーリアにキスをした。

アウグストはフィーリアの子宮頸管に５本のラミナリアを入れた。激痛に泣き叫びながらも、フィーリアはそれを拒まない。

子宮口付近に、たっぷりと生理食塩水を含んだ脱脂綿を詰め、クスコを抜く。この生理食塩水がラミナリアに吸収され膨らむまで、２時間の休憩を入れる。

血流が止まってしまう大陰唇のクリップは一時的に外した。しかし陰核を挟んだ板はそのままである。

(子宮頸管拡張で大陰唇をクリップで固定したのは、動いて子宮頸管を傷つけないため)

板に挟まれ、ぷっくりと膨らみ、紫色に変色し始めた陰核。そこに、先ほどフィーリアが身を捩り、５回ほど絶頂したタービンを固定。

「い、いや、それいや…いやぁぁぁ！」と叫ぶフィーリアを無視して、スイッチを入れる。

弱めではあるがタービンは振動し、今度は少しも逃れられない陰核を、集中的に責める。いや正確には、身体を動かすことは出来る。しかし動かせば陰核に激痛が走るのだ。動けば激痛。動かずとも、逃れたいほどの快楽。

フィーリアは2時間、そのジレンマの中で悶えるのだ。

脱水にならないように、最後に水分を取らせ、さらにアウグストは怪しげな錠剤を飲ませた。

アウグストがにこにこと笑うのが見えた。

造影（後書き）

１６部の「過去編」の後に、１７部「診察前」を挿入しました。しおりがずれたりしてる方は申し訳ありません。

性質

小児科医、新生児科医、保育士、教師、ベビーシッター、親…
子ども好きな人間は、子どもに関わる職や立場につきやすい。
日本ではたまに、教師と生徒との恋愛発覚や妊娠させたことにより
マスコミを賑わすことがあるが、あれは不幸にもたまたま見つかってしまった例で、「見つかってない」ものは世の中にもっとたくさんある。

子ども好きな人間が、子どもと関わるうちに、ただの師弟愛や親子愛ではなく、その一線の感情を超えてしまうことはよくあるのだ。
ただ、その欲望のままに手を出すか、出さないか。相手の気持ちだけを愛するのはまだいい。ただ、幼い身体を欲しいと思ってしまった時、それは最大の壁になる。危険性、世間体、相手の幼い思考…
それらを踏まえた上で、手を出すか。

理性を強く持ち、常識を持った小児性愛者でも、相手から好意を伝えられたら、普段抑えている分、甘い罪に抑制が効かなくなることはある。

世の中には赤ん坊を性対象に含む人間はたくさんいる。インドや南アフリカの性虐待は酷くなる一方だ。処女とセックスすればＡＩＤＳが治るという迷信が広がり、完全な処女性を求めて、９ヶ月の赤ん坊が６人の男達に「レイプ」され死亡した例も実際にあるし、赤ん坊が行方不明など日常茶飯事で、母親は泣き寝入り。

なにもカイドウが特別に異常なわけではない。いや、こんなにも相手の身体と心を守りながらの性虐は、その意味で希少な存在かも知れないが。

白衣を脱いだ僕とカイドウがリビングに戻ると、カイドウはさっさとシェリのところへ向かった。

ソファの上のキャリークーファン（出かける際に乳児を運ぶカゴ型のベッド）を覗き、すやすやと寝ている姿を見て、カイドウはとても安心した顔つきに戻る。そのままキャリークーファンの横に腰掛け、シェリの髪の毛をさらりとすいた。

僕はため息をつきながら、どさりとソファに倒れるように腰掛ける。助手が「お疲れさまでした。」と麦茶を持ってきたので、受け取った。

子宮をいじるのは、わりと神経を使う。子どもの子宮ならなおさらで、子宮の奥行きも伸縮性も、子どもの体型や成熟度により、ずいぶん違う。

助手がカイドウの前のテーブルに麦茶を置くと、カイドウは優しい顔で助手に礼を言う。

「ありがとう。小さな彼女は君を困らせなかったかな？」

「いいえ皆藤先生、とってもいい子でいらっしゃいましたよ。」

カイドウは助手に微笑みかけ、自分の、軽くウェーブがかかった髪をかきあげる。以前は焦げ茶色の髪だったのが、今はそれは毛先の

みで、ほとんどが黒く戻り、赤ん坊を拾ってからは染めていないこ
とが分かる。黒いシャツからはえる、細く繊細そうな腕は、その神
経の細さが分かるように、青白い血管が目立った。

カイドウが僕をちらりと見るので、僕と目が合う。いぶかしげな顔
で「なんです？」
と聞いてくるカイドウ。大事な娘を狼の前にさらすのがよほど嫌な
んだろう。

「いや、シェリのクリの傷は治ったノ？」

僕が勝手に赤ん坊の名前をシェリにしたことが気に入らないのか、
眉間にしわを寄せるカイドウ。なんでも顔に出る男なので、面白い。

「えぇ、かすかに傷跡はありますが、治ってますよ。」

「フゥン…抱き上げてもいい？」

「…」

「ソンナ嫌そうな顔しないでクレナイ？そろそろミルクあげなきゃ
イケナイ時間でしょう？」

僕はそう言って、助手に「ミルクね」と指示した。カイドウは諦め
たような顔をして、シェリを起こして、キャリークーファンから抱
き上げた。

最初は知らない人間に目をくりくりさせていたシェリだけど、僕が
ミルクをあげて、オムツを替えて、タカイタカイをして楽しませた

ら、きゃあきゃあと可愛い声で喜んでくれるようになった。
僕は子どもに好かれる性質だって分かってたけど、こんなに可愛い赤ん坊に好かれるのは、やっぱり嬉しいもんだ。
オムツを替える時に、シェリの性器を開いてじっくり視診と触診してたら、カイドウは呆れたようにため息をついてたけど。
包皮が無くなっている小さな小さなクリトリスは、赤い真珠のようにツヤツヤと光っていた。
シェリの頭は約１２㎝、首から股まで約３０㎝、足が約１５㎝。チャックを開いて、僕のものをシェリの性器にあてがってみると、ちょうどシェリの胸のあたりまでペニスが来る。それを見て僕は大笑いした。小さな手、小さな足、小さな小さな性器。少し乱暴に扱えば壊れそうな赤ん坊の身体は、僕の保護欲を掻き立てた。
そうしてシェリと仲良くなって、シェリが再び眠りにつく頃には、ちょうど2時間ほど経っていた。
フィーリアの痛みも限界だろう。僕とカイドウはまた、白衣をはおって診察室に入っていった。

子宮

切迫早産がおこった時、陣痛を抑える薬がある。
子宮筋弛緩剤。
これは子宮のβ2レセプターを刺激することで筋肉を弛緩させ、収縮状態から脱する。副作用として、激しい動悸がある場合がある。

経口薬の場合、じわじわとそれは効いていき、それほど強い副作用はないが、アウグストはフィーリアに、通常の三分の1量しか与えていない。ほんの気休め程度。だが、ないよりは幾分かましだろう。

「ぎ…ギァァァァァ!!　いだ、いたイィィイ!!　!!」

1.5倍に膨らんだラミナリア桿を私が引き抜くとき、それまで、顔を赤らめ、泣き声を抑えてすすり泣いていたフィーリアだが、その痛みに耐え切れずに泣き叫んだ。

「せん、せぇッ…ゆっくり…もっとゆっくり抜い…キァぁぁぁン!!
　…!!」

止血はないので、傷はほとんどないだろう。
排水トレイには、興奮した痕跡の愛液と、子宮頸管液、アルコールなどが混じりあっていた。

陣痛が来た妊婦の内診時のように、ゼリーをたっぷりと付けた指を入れ、子宮口の開き具合を診る。子宮頸管長は3㎝、直径は…指4本分。直径5㎝程度に拡がっていた。もしこれが妊婦なら、すぐに

入院が必要な時期だ。内子宮口より外子宮口のほうが拡がりを見せる逆楔形になり、膣からの挿入に適した形になった。

フィーリアは痛みに泣き叫びながらも、その顔は痛みと恍惚が入り混じり、快感を得ていた。2時間振動されていた陰核は赤く膨らみ、痛みを快感へと促すタービン役目は全うしたようだ。

挿入していた直腸バルーンを〝そのまま〟引き抜き、再び絶叫させると、肛門鏡で傷や荒れがないかチェック。ついでにクリームワセリンをたっぷりと腸内に塗り込み、甘い声を出させた。

さらに、子宮を立たせるために、カテーテルで膀胱に400mlほどの精製水を貯めさせ、「こぼしちゃ駄目だよ」と指示をして、カテーテルを抜いた。

―――

キングサイズベッドにはふわふわとしたマットレスが敷かれ、私たちを歓迎した。シーツからは洗剤の香りがする。

内蔵の準備が整い、意識が遠のいているフィーリアの両腕を背中に回し、包帯でぐるぐると両腕をひとまとめにしていく。

胸を強調するような形になったフィーリアの身体。表面にはしっとりと汗をかいて、白い肌は光っていた。

フィーリアは潤んだ目で、虚ろながらまっすぐ前を見る。フィーリアの前には、ヘッドボードに枕を挟んで寄りかかるアウグストが、フィーリアの上半身を支えている。

アウグストの大きなペニスは、股がるフィーリアの性器に擦り付けるようにぬるぬると前後し、後ろの私からは、フィーリアのお尻からペニスの先が見えたり隠れたりした。ペニスにはフィーリアの愛液が塗られ、てらてらと濡れ光っている。ヌチャッっと時折、フィーリアの性器とアウグストのペニスの水音が聞こえる。

私もフィーリアの臀部の割れ目に軽くペニスを擦り付け、息を荒くするフィーリアの細い二の腕を持ち、後ろから耳元で囁く。

「フィーリア、どっちから入れて欲しぃ？」

掴む腕が、その言葉でぶるっと震えた。

「…ぁ」

「言わないと、私もパパも入れてあげないよ。ほら。」

「ふ…うぅ…」

二本のペニスが細く身体に擦り付けられ、ヌチヌチと音を立てる。答えられないフィーリアの肩甲骨が浮き出た背中を、中腹あたりから首すじまで舌でゆっくりと登っていく。

「あ…ぁぅぅん…」

背中をそらしてびくびくと反応する幼い身体。髪をかきわけ、そのまま小さな耳たぶを唇に挟む。柔らかく産毛が生えている耳たぶを2．3度吸うようにしてから、歯を立てて噛む。「ぃた…」と声が上げるが、まつ毛を揺らし、弛緩した顔で感じていることを知らせてくれる。

片手を二の腕からゆっくりと滑らせるように降ろして行き、ウエスト、お尻の丸みを確かめるようにしながら、ピンクに色付いたお尻の穴にたどり着く。そこにちょんと指を触れさせると、たくさんの皺がヒクヒクと収縮した。

ワセリンを取り、その皺へと塗り付ける。人差し指の先が埋まると、フィーリアは「ふ…ぅぅぅ」と力を抜くように息を吐いた。

アウグストが何も言わず、自分のペニスを前後させることをやめて、フィーリアのお尻を軽く浮かせる。赤く腫れたクリトリスに擦り付け、軽く嬌声を上げさせてから、その下のすぼまりの泉へとペニスを当てがう。

フィーリアが期待から、ふるふると身体を震わせる。アウグストの大きな手が細い腰を導き、その先端はくちゅっと音を立てて埋まる。しかし、それ以上は進まず、入り口で焦らすように、ゆっくりと腰を前後させた。

「パパ…パパァ…」

「ナァニ、フィーリア？」

アウグストは愛おしげに、フィーリアの顔に手を伸ばす。金髪の髪に指を差し込んで、上気したピンク色の頬に手を添えた。

「パパ…の…欲しい…」

「フ…そうゆう時はなナンテ言うノ？」

「…パパの、パパの、…おちんちん、フィーリア…に、入れて…下

さいっ」

「…ヨク言えマシタ。でもマダ、イっちゃダメダカラネ」

アウグストはフィーリアの骨盤を支えるようにしながら、ゆっくりと小さな膣の奥へと、ペニスを埋めていく。

「あ…ふぁぁぁぁあ…」

フィーリアの腰が震え、イきそうになっているのが分かる。私はアナルに入れた指をくっとかぎづめ形にして、イくのを堪えさせた。

「まだだよー、まだイっちゃだめだよ。閉じちゃうからねー。」

「ふ…くぅ…」

やがてアウグストのペニスは、壺の中に半分ほど埋まり止まった。私は両手でフィーリアの背中を支えるようにして、フィーリアの上体を後ろに倒していく。１５度ほど倒れたのを確認し、アウグストと目を合わせた。子宮は普段、膀胱にかぶさるように前に倒れている。膀胱を膨らませ、ペニスと子宮の角度を合わせることで、挿入する負担を軽減できる。アウグストはフィーリアの骨盤を両手で掴んだ。

「フィーリアー、シキュウにイクヨー。…イチ、二…サン!!」

「…ヒャィィィ…ン…ッッ!」

フィーリアの身体がガクガクと痙攣する。
虚ろに薄く開けられていた目が見開かれ、毛穴が開く。白い喉を反

らして、美しい金髪をうねらせた。

ラミナリア桿よりは滑らかな表面のペニスだが、痛みが無い訳では無い。１０歳の出産経験もない少女が、白人のものを根元まで受け入れている。

子宮頚管と子宮を広げられる痛みと、膣の快感が入り混じり、フィーリアは混乱の中に突き落とされる。

フィーリアを支えながら、フィーリアの上体を今度は前にゆっくりと倒していく。アウグストが肩を引き寄せ、そしてお尻の肉を掴んで支えた。こちらからは、ピンクに染まった排泄口が見えるようになった。

意識が飛びかけたフィーリアのアナルにクリームワセリンを塗り込み、私のペニスにもさらに塗る。脂肪が少ない体質は、裂けやすい。

ワセリンと入り口をペニスによく馴染ませながら、毎秒１㎜程度のスピードで腸に進める。フィーリアは「ぁ…ふぁ…ぁぁ…」と、吐息とも喘ぎともつかない声をだしながらも、拒否はしない。２分から３分ほどの時間をかけて、私は熱い腸内に、ゆっくりと根元まで挿入した。

アウグストのペニスの形と律動が、薄い腸壁越しに伝わる。奥には子宮頚管の硬さも認められた。

2本の大きなペニスを体内に全て納めたフィーリアは、アウグストの胸に寄りかかり、幸せそうな顔を浮かべていた。

あらゆる体位で、とろけるまで犯した。交代して私も彼女の子宮を味わい、２度３度とフィーリアの中に欲望を吐き出していった。剥き出しのクリトリスにハッカ油の原液を塗り込み、メントールで真っ赤に腫れ上がらせ、火傷したような痛みで泣かせる。気を失えば、子宮に手を突き入れたり、腫れ上がったクリトリスと乳首を鰐口で挟んで、強めの電流で覚醒させた。膣口と肛門から数億の精子がゴポリと溢れ出る頃には、フィーリアは悲鳴もあげなくなり、その表情は全てを受け入れるような、慈愛とも悲壮ともつかないものになった。

フィーリアが目覚めなくなった頃には、私たちが会ってから１０時間近く経っていた。

子宮内と腸内を精製水で洗浄し、死んだように眠るフィーリアの両側に寄り添って、私もアウグストも深い眠りに落ちた。

ずいぶんと長い時間眠っていたような気がする。赤ん坊の彼女を拾ってから、こんなに長い時間、眠ったことはない。

目覚めの霞んだ視界の中に、窓から入る光に照らされたフィーリアがいた。肌が光を反射して少し眩しくすらある。すうすうと寝息を立て、私の胸に寄り添って。

太陽光に透けてキラキラと光る髪をすいて、２・３度頭を撫でてやると、「ん…」と可愛い声を出した。

ふと、向こう側に寝ていたはずの、アウグストがいないことに気付く。

ぼんやりと行き先に見当がついたので、私はフィーリアを起こさないように、ゆっくりとベッドから抜け出した。

「ヤァ、カイドウ。オハヨウ。良かったネ、シェリー、パパが起きてキタヨー。」

リビングで、アウグストは彼女を縦抱きし、あやしながらそう言った。彼女は口に指を咥えてしゃぶっている。

助手の女性が奥のキッチンから出て来て

「あら、皆藤先生、お早う御座います。もうお昼ですけれど。よくお眠りになりました？朝食準備しておりますので、持って来ますね。」

早口に助手は言うと、キッチンに戻って私のために朝食を用意してくれる。髪をおだんごにまとめた背の小さい彼女は、パタパタとスリッパを鳴らしてあるく。名前は雪と言うらしい。

「フィーリアはまだヨク寝テル？」

「えぇ、数時間はまだ眠ったままだと思います…彼女を。」

私はアウグストから彼女をすっと受け取る。…すこし、ぼーっとした様子だが、特におかしなところはない。

アウグストはにこにこして、「どうしたの？」なんて白けた顔をしている。
念のためにオムツを取り、膣の中にも少し手荒に小指を入れたが、特に変わりない。いや、アウグストが何もしないはずがない。何かをしでかさなかったことがない奴なのだ。私の父親を殴った時だって、病院スタッフみんなを唖然とさせたほどの男なんだから。

彼女の膣壁をぐるりと一周探ると、彼女はふぇーんと泣きだした。潤滑も無しにいきなり指を入れて、痛みを与えてしまった。
再びオムツを当て戻して抱き上げ、背中を撫でる。
アウグストに「何かしました？」と聞いた。「シェリーは可愛いネー。ソウイウバ、今日プレゼントしようと思って取り寄せタンダヨ。」
アウグストはテーブルの上の紙袋からガサガサと何かを取り出す。
紙袋は有名なベビー用品店のロゴが入っている。ホラ可愛いデショとアウグストが広げて見せたのは、薄いピンク色の幼児用ドレスだった。レースがふわふわと重ねられ、リボンやビーズがあしらわれた、とても可愛いもの。

「はぁ…ありがとうございます。」

アウグストは、〝何か〟をしたんだろう。けど、言わないだろうなぁと諦める。この、にこにことした金髪変態から、何か聞きだせる気が全くしない。

「あら、可愛らしいベビードレス！シェリーちゃんへ？アウグスト先生、あなたいいセンス持ってるのね。」

トレイに私の朝食と、２人分のコーヒーを乗せて来てくれた雪ちゃんが、アウグストの手に持ったドレスを目にして褒める。私から見

て、かなり可愛らしい女性がそう評価するドレスは、確かにとても可愛い。

「フフ、デショー、ユキチャン。デモ実は、フィーリアと一緒に選んだンダヨネ。フィーリアがアゲターイってネ。」

「それはフィーリアに、お礼を言わなきゃいけませんね。」

テーブルにトレイを置くと、雪はアウグストからドレスを受け取る。裏と表とくるくる回しながら、目をキラキラさせた。

「これ、フィーリアお嬢さまが起きてくる前に、シェリーさんへ着せましょう？フィーリアお嬢さま、きっと喜ばれますよ！皆藤さまよろしいでしょう？」

興奮ぎみに私に笑顔を向ける雪ちゃん。

「じゃあ、良かったらこの子に着せてもらっていい？」と、私は彼女を預けた。「喜んで」と雪は言って、大事そうに彼女とドレスを抱え、廊下へとパタパタと歩いた。

私はソファーに座って、アウグストの分のコーヒーを向こう側へ置く。私の分のコーヒーを飲むと、乾いた喉に、薄めのアメリカンコーヒーが染みた。トレイにはサラダとトースト、ゆでたまごが乗っている。フォークでトマトをつつきながら、私は喋る。

「アウグスト、あなたはフィーリアが大人になったら、あの子を手放します？」

「ンー？フフ、イキナリどうしたの？…そうだなぁ、卒業したら、

手放すヨ。…多分、ズイブン先にナルケド。フィーリアの成長に、ボクが妨げにナルト、ボクが判断して、フィーリアが一人で立てるようにナッテレバ、普通の親子に戻ルダロウネ。

アー、デモ、結婚相手はボクよりイイ男にしか認メナイケドネ。フフフ。」

「フィーリアにはきちんと人格も人権もあると、貴方が認めてるからですね。とても将来を見据えてる。」

「アノ子は人間で、ボクの娘ダカラネ。ボクはフィーリアの親で、アノ子が自立出来るようにサポートして行くのが役目ダヨ。ダカラボクはある意味フィーリアの召使い。SはMでアリ…フフ。召使いトシテ、アノ子が幸せにナレルヨウにチカラにナルダケ。」

私はカチカチと、サラダが盛り付けられた白い皿のフチでフォークを鳴らした。自分の中の葛藤が大きくなる。喉が詰まったように、呼吸がし辛い。

「デモ…ソウダネ。アノ子は…他人ジャダメダカラ。寂しがりデ。自分で立テルヨウニなる日なんて、来ないようにも思うヨ。ボクはアノ子の願望通り子ドモで居させてル。弱いママにネ。」

「弱いままでも愛されてるフィーリアは、ずるいですね。」

アウグストはコーヒーにスティックシュガーを1本入れた。カチャカチャとかき混ぜると、黒い液体はくるくると渦を巻いて、光の反射で所々に白い線が入っては、渦に巻き込まれ消えて行った。

「…カイドウは、立テナイ子にシタインデショウ。人間トシテの人権もなく、財産もなく、思考も行動も自由ジャナイ。自分で服のボ

タンさえ閉メラレナイ。フォークもモテナイ。溺愛だネ。アノ子は君がいないと死んじゃうケド、それは君モ。君がアノ子に溺れてルンダヨネ。」

「…ええ。私は弱いから、小児性愛者なんですよ。」

「フフ、ソレを認められルカイドウはスゴイネ。」

「駄目人間ですね。ロリコンにろくな奴は居ない。」

私はふふっと笑った。
アウグストも、同じように笑う。
私はミニトマトにフォークをプチっと刺して、口に放り込んだ。
少しして、ピンクのドレスを着た小さな彼女が戻って来た。
…とても可愛らしい。雪ちゃんが、赤いキューブのついたゴムで、前髪をぴょこんと上に結ってくれたようで、おでこが出ている。
彼女はキョトンとした顔で、純粋すぎる目をしていた。

2時間後に起きたフィーリアが、ベビードレスを着た彼女を見てとても喜んだ。おっかなびっくりと、初めて赤ん坊を抱っこしたフィーリアは、嬉しそうに笑う。
天使の微笑みと、ベビードレスを着た赤ん坊はあまりに可愛らしかったので、それを写真におさめた。

溺愛（後書き）

新年明けましておめでとうございます。
昨年はたいへんお世話になりました。今年もよろしくお願いします。

昨年７月から始めたこの小説も、遅筆ながら約６万字ほどの長さに成長しました。
それも、いつも読んで下さる読者の方々のおかげでございます。しおりはとうとう５００を超え、総合アクセスは２５万回にもなりました。ずっと更新していない日でも５００～１０００ほどのアクセスがあり、それだけ楽しみにチェックして頂けていることに、嬉しくもあり励みにもなっています。
感想や評価を頂けることがとっても嬉しく、書くエネルギーとなっています。よろしくお願いします。

葛藤

私は、私が好きではない。
自分への嫌悪感。自分が気持ち悪く醜いと思う。特に、自分の体液を、相手に付着させることには、強い抵抗があった。相手に、自分の汚れを移してしまう気がする。

昔、臨床心理士と話した時に、この気持ち悪さは、幼少期の親からの評価が、そのまま残っているのだろうという話を聞いた。
完璧でなくていい。自分で自分を褒め、自分の評価は自分ですればよいと聞いた。
私は私なりに、自分の評価を下げない努力をしてきた。しかしそれは、自分の〝潔癖さ〟に磨きをかけるだけだった。

彼女を拾ってから、
私はＰＣモニタの画面を磨く回数が、減った。

彼女はお座りが出来るようになった。
彼女はハイハイが出来るようになった。
彼女は捕まり立ちが出来るようになった。

少しずつ彼女に、出来ることが増えていく。

「てーてぇー」

例えば私のことを、こう呼べるようになったのも、出来るようになった一つだ。

彼女はお気に入りの、カラカラと音の鳴るおもちゃを掴んで、私に遊んで欲しいとねだる。

彼女が起きている時間は、なるべく一緒に過ごしているし、三時間ほどしたら私は彼女が起きていても、部屋に戻る。彼女はやることがなくなり、あきらめて寝るようになった。彼女は彼女なりに、ひとりの自分を楽しめている。

オムツを替えの時、彼女は足を大きく広げ、パンパンとお腹の下を叩きながら「てーてぇー、まんまー！」と喋る。

彼女は別に空腹を訴えているわけではなく、早くそこを舐めてほしいと訴えている。

「まんま」なのは、口に含む様子が、食べる動作に似ているからだろう。

彼女の腕がまだ短いので、叩く位置は女性器ではなくお腹になる。腕が長くなれば、彼女は誰より早くオナニーを覚えるだろう。ただ、偶然的に、彼女の短い手が叩いている位置は、彼女の子宮がある位置だ。

「まんまー、まま！てんて！」

「ふふ、いい子。先生が舐めてあげようね」

そう答えて、私は彼女の剥き出しのクリトリスを、尖らせた舌で舐めてあげる。彼女は恍惚とした表情で、「あふ…ぁっ、ぁ」と声を

上げる。
包皮を切除してふた月ほどは、舐めあげることが出来なかった。敏感すぎる陰核は、舐められる刺激が強すぎて、彼女は泣いて嫌がった。嫌がる彼女にそれでも、優しく舐めあげることを続けていると、彼女は強すぎる刺激の中に少しずつ快感を見つけ出していき、今では自分からこうしておねだりする。

このままイかせてあげるのもいいが、最近はなるべく中イキを覚えさせようと思っている。

「んっ、んー」
「入れてあげようね」

彼女が顔を赤らめ、ずいぶんと欲情してきたところで、私は親指大の、小さなシルバーローターにゼリーをたっぷりと付ける。
小さく閉じている膣口にローターをヌルヌルと擦り付け、しばらく馴染ませると、やや抵抗はあるがスルッと中に入った。
「アンんっっ」
「入っちゃったねー。ちょっと苦しいかな?」
「あふ…くうちー」
「ちょっとずつ慣れていこうね」
彼女から伸びているコードを少し引っ張ると、ぴょんと彼女からローターが抜けかける。それを再び指で押し込んで、ゆっくりと、何度か入れたり出したりを繰り返す。その度に彼女は「あっ、あん」と、可愛らしい声を出してくれた。
ローターをぐっと奥に押し込み「やぁぁ!」と鳴かせてから、再びクリトリスを舐めあげる。先ほどよりも赤く熟れた小さすぎる果実は、ピクピクと震える。

「あっあっ、でちゃー」
2．3分続けていると、彼女の小さな膣口が、少しずつ盛り上がり、中からシルバーが覗く。
私はそれを再び押し込んで、再びクリトリスを舐めてあげる。

「ヤッ！てーてぇー…ちゃー、きちゃーぁぁ！」
彼女の声のトーンが上がっていく。キスを覚えるより先に、敏感な神経を舐めあげられる快感を覚えた彼女は、あっという間に上り詰めていく。

あとひと舐めで飛びそうなところで、私は彼女のクリトリスから舌を離した。
彼女が悲しい顔をする前に、リモコンのスイッチを押すと、ローターが振動し、彼女は「あんんっ」とお腹を反らした。

こうして、クリトリスの快感と中の快感の、回路を繋げていく。

「てんて！てーてぇー！やぁぁぁん！」
びくん！と彼女が大きく身体を突っぱねて、絶頂に達する。
ローターのスイッチを切り、トロトロに熱くなったところから、ローターを引っ張って抜く。一度絶頂した彼女の膣の入り口は締まり、抜くのに少しの抵抗があった。ヌルンと抜けたあとも、膣口はまるで、まだその快感を味わいたいかのような動きをした。

「…てーてぇー？」
恍惚とした表情で、私をみつめる彼女。

彼女はベッドの上でハイハイをして、私に近づく。
あぐらをかいた私の足の間に入り、抱っこをねだってきた。私は彼女の背中を何度かさすり、おでこにキスをする。
彼女はにぱっっっと笑うと、また「てーてぇー」と言って、私の服を掴んだ。

音色

雨が、ガラスを叩く音と、波が押し寄せる音が、車内に響いていた。
今年は、例年よりも早く梅雨入りし、記録的な雨量を観測している。
夜が明ける前の、薄暗く、冷たい空気。
私は雨の日、よくこうして、高速を使って、この海に来た。
パタタタ…と、雨がガラスで弾ける音に混じり、ザァ……と、波が押し寄せる音が、聞こえる。

水の音が好きだった。

水音は、母親の、胎内で聞く音と似ているため、リラックス効果があると、研究家が言う。

夜、満ちていった潮は、陽が出る前に、少しずつ引いていき…
…車と、波の間の距離は、いつの間にか、広い砂浜に変わり、遠く離れていた。

薄暗い世界で、車のエンジンをかける。

口に加えた煙草に、シガーライターを押し付けて、車を走らせた。

ベビーモニターを見ると、彼女は既に起きて、ひとりでおもちゃで

遊んでいた。
その姿を見ると、私の胸はまるで、冷たく冷え切っていた体が、暖かくなっていくようだった。
私は冷蔵庫から、リンゴを取り出し、皮を剥いた。

ピピピッっと、暗証番号を押し、電子ロックの扉を開けると、彼女が満面の笑みで出迎えてくれる。

「あぁー！あ！てんてー！」

「おはよう。ごきげんにしてた？」

「うー！まんまー！みゃんま！」

「君が好きな、すりリンゴ」

「りゅごー！」

目をキラキラと輝かせる彼女。
細かくなったリンゴを、ピンクのスプーンにひとさじ掬うと、可愛く手足をパタパタさせる。

「はい、あーん」

「あぶ…あー…」

スプーンを口から抜いた瞬間、彼女は、幸せそうに笑う。
「美味しい？」

「…あぅう…おいちゅぃー！あー！」

口の中の甘酸っぱいリンゴを、転がすように小さな口腔内を満たし、幸せの顔をする。

飲み込んだら、また口を開けて、おねだりをした。

「今日は、雨が降ってるよ」

「あぅー？やゅー？」

そう伝えても、彼女は、ポカンとする。

…彼女には、雨が分からない。

水がどう降るのか、雨が降るとどんな音がするのか、雨の匂いも、何も知らない。

彼女にとって、その話は、扉の向こうの遠い世界の物語りだ。本の中のシンデレラの話と、何も変わらない。現実味のない、夢物語だ。

1歳の誕生日にあげた、うさぎのぬいぐるみを、彼女はぎゅっと握りしめて、離さない。

「はい、おしまーい。ごちそーさまでした。」

「あぶーあーちゃまー」

「さてさて…うんちは出たかなー？」

そう言って、走り出そうとする彼女を捕まえて、パンツタイプのオムツの、お尻の方を引っ張って、うんちを確認するが、出ていない。

一昨日の朝から出ていないので、４８時間ほど。彼女は便秘気味になっているようだ。

「あれれー、出てないねー。んー。お腹苦しいかなぁー？」

彼女をひょいと抱える。
新しいオムツと、お尻ふきと、ベビーオイル、綿棒をサイドに置き、バスタオルをベッドに敷いて、彼女をうつ伏せに寝かせる。

「うーやー」と、遊びたいのに、寝かされた彼女は、文句を言って不満を訴える。

「はいはい、うんち出そうね」と、背中をぽんぽんと叩くと、彼女は少しだけ、おとなしくなる。うさぎのぬいぐるみの、長い耳を、ぎゅっと握りしめる、小さな手がいじらしい。
お尻ふきで、自分の手指を拭き、ベビーオイルを人差し指にたっぷり垂らし、彼女の肛門に当てる。
そのままクチクチと、オイルを馴染ませ彼女のピンクの肛門を揉みこむ。
指先が少しだけ、シワを広げて埋まる。

「あうっ、やぁー」
その不快感に、いやいやをするが、背中を私に抑えられ、動けない。
…世界で一番、柔らかくすべすべとしたお尻が、刺激があるたびに、ぷるぷると震える…。

……あぁ、齧みつきたい。
その欲求を抑えながら、指先のベビーオイルを拭うと、太めの綿棒

に、オイルを染み込ませる。

そっと、小さな排泄口に綿棒を押し当てると、それほど抵抗なく、つぷっっと、白い綿棒が埋まっていく。

「あぶー…あぅぅぅ…」

彼女は悩ましい声をあげながら、異物が入ってくる感覚に、ひたすら耐えなければならない。

肛門を広げるように、ゆっくりと綿棒を回し、直腸をじっくりと刺激して、排泄欲求を高める。
2分ほどしてから、ゆっくりと綿棒を抜く…小さな肛門は内側から盛り上がり、広がり、茶色に染まった綿棒が抜けた。
彼女を仰向けに寝かせ、お腹をのの字にゆっくりとさする。

「これで出てくれればいいんだけどなぁ…はい、うんち出そうねー。んーんーするよー」

「ぅぅぅんー」

彼女の肛門は、ひくひくと動き、何度か盛り上がるも、便は出てくる様子はない。

「ごめんねー。もう一回するからね。」

そう言って、彼女をもう一度うつ伏せにする。彼女は少し疲れたように、いやいやをする。
新しい綿棒に再びオイルをたっぷりつけ、つぷぷぷ…と、埋めて行く。

綿棒をぐるぐると回し、直腸の奥まで綿棒を押し当てると、今度は彼女の左側…Ｓ字結腸側へ、綿棒の先をグイッと傾けた。

彼女は、直腸を硬い異物がひっ掻く痛みに、うぇぇぇん！と泣きだし、手足をばたつかせ、暴れ出す。

綿棒が、一度でうまく結腸へと入った感触を手に感じ、心の中でガッツポーズをする。

ぐりぐりと、結腸の中を探るように綿棒を動かせば、奥の方に、硬い便があった。

これが、彼女のＳ字結腸から直腸へと移動せず、便を詰まらせている。

硬い便を、綿棒の先で崩すようにつつくと、ヒックヒックと泣く彼女も、それに合わせ、「あぅっあぅぅ」と声を出し、ピクピクとお尻を震わせた。

「よしよし、いい子だったね」

彼女は広げたオムツの上に、少し固くなった便を、多めに排泄した。

「もう、お腹、苦しくないでしょ？」

彼女のお尻を、冷たいお尻ふきで、拭いていく。

お尻拭きには、「水９９％　新生児から使えるおもいやりシート」と文字が入っている。

彼女の、鼻の頭がまだ赤く、泣いた跡が頬に残る。

拭き終わり、汚れたオムツとお尻拭きを小さな袋に入れて捨てる。

「…てんてぇ、てんてぇ」

「はぁい？」

「まんま」

ペチペチと、彼女は自分のお腹を叩いた。
ぷにぷにとした足を大きく開いて、可愛く色付いたそこを、見せつける。

「ふふ、…欲しいの？」

彼女の、深い溝に人差し指を埋めると、そこから、くちゅりと音がした。
先ほど、お尻を拭いていた時から、彼女のそこの変化に、私は気付いていた。

「目…とろとろに溶けてるね」

泣いていたはずの瞳は、もの欲しそうな瞳に変わり、私にまっすぐ向けていた。

溝に埋めた指先を、保護するものを失った、敏感すぎる突起に滑らせる。
彼女から溢れる、ヌルヌルを利用して、突起を優しくなぶると、あぅうん、と彼女が喘いだ。
彼女の、息が少しずつ乱れ、興奮して行く様子が伝わってくる。
ひょい、と彼女を抱き上げ、キングベッドの上で、壁を背にして、

あぐらをかいた。
その足の間に、彼女を、背中を向けて座らせ、後ろから抱きしめる。
小さな身体は、足の間に座っても、まだ隙間がある。
猫背になって、彼女の髪に、キスをする。
サラサラと細い髪から、優しい赤ん坊の香りと、石鹸の香りがした。
さくらんぼ色の唇が、半開きになっている。
そこに、中指を近づけると、彼女はチロチロと舐めてくれる。
私はまるで、それを舐められてるかのように、中指は異常なほど敏感に感じ、顔をしかめた。
もう片方の手で、柔らかな彼女の小さな足をフニフニと触る。柔らかくもちもちとした肌。今はまだ、ふっくらとして、シワがたくさんあるが、いずれは、すらっとした、細く張りのある足になる。
徐々に、私の指先は、薄い皮膚を登っていき、彼女の一番敏感なところへたどり着く。
彼女が、期待に満ちた表情になる…物欲しそうに、私の指先に吸い付き離さない……しかし、私の手は、そこから離れ、何度も足を撫でる。
彼女は焦れて、私の指を口から出し、やぁぁ、と不満を訴える。
口からはよだれが垂れ、これ以上ないほど、私の背筋をゾクゾクさせる顔を、彼女はしている…
彼女の愛液は、私のズボンに、小さなシミを作るほどに、垂れてい

た。

「……てーてぇぇ……」

「ふふ、触って欲しいの？」

「……あうゅーぅ……」

「言ってごらん、〝さわってください〟だよ」

「さーぅ……」

「〝さわって　ください〟
〝さ・わ・って〟」

「しゃ、あて」

「〝く・だ・さ・い〟」

「くー、たい」

「よく言えました。ご褒美だよ」

彼女が、初めて私におねだりできたことがうれしかった。
頭をよしよしと撫でて、そこに手を伸ばす。
大陰唇を開いて、クリトリスをひと撫でした瞬間、彼女は悲鳴のような声を上げて、仰け反る。
私は彼女のお腹を支えながら、なおもクリトリスを追いかけ、なぶ

り続ける…

…彼女が2回ほどイき、疲れて動きが鈍くなってきた時、隙を見計らって、彼女の赤くなった小さな耳をぱくっと食べると、彼女の体は大きく揺れ、…ずるずると私にもたれかかるように、落ちていった。

私は彼女の、細くサラサラの髪を撫でながら、そのままベッドに横にし、裸の彼女に、新しいバスタオルをふわりとかけた。

私は横向きになり、手を耳に当てて頭を支え、肘をベッドに沈ませ、彼女を上から見る体勢になる。

お腹をトントンすると、疲れたのだろう、彼女はすうすうと、寝息を立て始める。

さらりと、顔にかかった髪をよける。

…伸びて、きたなぁ。
今度…切ってあげなきゃ…

彼女をお風呂に入れなければと思いながら…私は彼女の可愛い寝息のリズムにつられ、少し早い昼寝に、入っていった…